

昭和四十一年一月九日 印刷
昭和四十一年十二月十五日 印刷
昭和四十一年一月一日發行
（毎月一日發行）
（第一六五号）

川柳塔



No. 16

第2回ゆ一もあ特集

一月号



えらばれ

みがきぬかれた

灘の酒

超特撰

日本

盛



超特撰

（「新」ゲキス人）
「ハ」リツトル詰・一〇〇〇円

酒

日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



新発売！強化された肝臓保健薬

チオクタン[®]S

●疲れ●肌あれ●酒●タバコに

（日酔い） （肌荒れ） （二日酔い）



このマークの
お店で
お求めください



フジサワ薬品



「チオクタン」
「S」

緒形 拳

酒断って第二の人生の夢と棲み
夢豊か心の扉そっとしめ
すれすれのところで善意が媚となり
出会いの宿縁だまされた方が拜んでる
陥し穴這い出て心やすらぎぬ

今月のことば

明けまして新年おめでとう

◎新しいというものはなんとなく、清新で明るい気がする。それでめでたいというのだろう。

◎然し、何から何まで新しければいいとはかりは限らぬ。新年勿々妙にからむじやないかと思わないでほしい。これは私の習癖らしいが、新しい歯ブラシ、新しいタオル新しい靴は如何にも気に入る。お正月ともなると家族のものがこの三つを新品ととりかえたがるが私はかたくなに中古品で元旦を迎えたいの

である。自動車でも五百から千キロ走った頃がエンジンが一番快適と聞くが、歯ブラシの歯あたり、タオルの膚ざわり、靴の爪先き。どれも新品はまずい。と言うて女房の使い古しのタオルや歯ブラシ、子供達から払い下げの中古靴というわけにもゆかず、止むをえず年に幾度かは新品にするにはする。

◎「川柳塔」も百キロ程は走った。エンジンの調子が少々楽しい音である。

◎相変らずとはいいい言葉である。本年も相変りませず、よろしくご指導を乞う。

川柳塔一月号

川柳塔新年号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖

中島生々庵 (1)

川柳塔

(同人作品)

中島生々庵選 (6)

北川春巢 (37)

特集・あも一ゆ

★笑いにについて
★同人作品

多久志・七面山・文庫・靈眼子・章雅・秋月・日満・布堂・拳法・恵二朗・一水・八郎・鉄舟・素身郎・梅志・飄太・柳志・千梢・無聖・与志・文秋・快夢起・泉水・不水・東雲楼・しげお・十九平・潮花・太茂津・乱坊・幽谷・柳葉・丁路・初甫・玲人・万里歩・三幸・求女・兎男・涼人・柳慶・好祐・阿茶・白柳・きさ子・独仙・醉夢・一保・曉舟・明朗・形水・魯木・小松園・久米雄・静観堂・千翁・英子・甦光・愛鳩・旅風・静馬・あき坊・一栄・古方・竹莊・狂二・睦夫・みのる・いわを・可住・あいさ・与呂志・徹也・水客・どんたく・久雄・滋雀・芳仙・奇童・凡九郎・義英・甲吉・薫風・杜的・緑之助・静水・花宵・季賛・摩太郎・一三夫 (到着順)

昨年の夢今年の夢
川柳初篇研究

(四十三)

中島生々庵 (4)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・

川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

(24)

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤梅志……………(46)

大阪文化祭川柳大会……………戸田古方……………(39)

生駒から……………麻生葭乃……………(23)

川柳塔社同人名簿…………………………(56)

近作柳樽……………若本多久志選……………(40)

大萬川柳「職人」入選発表……………清水白柳選……………(54)

初步教室……………菊沢小松園……………(49)

★柳界展望……………(薰風)……………(58)

★本社十二月句会……………(庸佑)……………(60)

★各地柳壇……………(文秋)……………(63)

一路集「夢」……………永尾永断選……………(52)

「酒」……………渡辺曉童選……………(52)

「紙」……………大西八步選……………(53)

★編集後記……………白柳・一三夫……………(76)

昨年の夢 今年の夢

中島生々庵

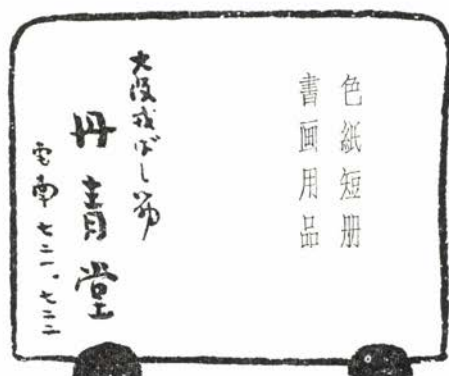
明けましておめでとございます。

「川柳塔」第二回目のお正月です。昨年のお正月からの一年間、それは初夢から続いた夢、夢の集積だったと申し上げてもいいと思います。第二回目のお正月と申しまして、つい先ごろ誕生一周年を迎えたばかりで、やっと一人歩きの出るようになったお正月ではないのですから、楽しい夢とか、悲しい夢とか夢・夢の集積、それはおとなの皆様からご覧になったらほんとうにちゃん、シャボン玉のような夢でしかなかったかとも申せましょう。それでも当人の「川柳塔」にとりましては、なかなかどう仕りまして、どこまでも真剣な足どりで遅しく大地をふんまえて歩いて来たつもり、涙ぐましいまでの夢の蓄積でありましたことに相違ございません。夢というものは、いろいろの空想にもつながり、そのまま将来へのあこがれとして燃え上がり、やがては厚かましく、身の程も知らぬ悲願にまで

成長させてゆく
真実ささえも抱
いているもので
ございます。

一年前の新年のご挨拶には「これからさきに予想される重さ、深さ、厚さを考えてみると恐ろしいようでもありますがその苦しさ恐ろしさの中にこそ生きがいの希望やたのしさもありうるわけで、絶対に挫けてはならぬ大切な歳の正月でもあります」と、今から考えてみると多少は銜氣らしいものさえ交って見える夢を描いておりました。しかし「川柳塔」は決して銜氣でもなく、背伸びでもなく——それどころか生まれてわずか三か月で迎えたお正月の覚悟としては、あっぱれ武士の子、初陣の門出としてほめてやってもいいと今日現在でも自負しておりますわけでございます。

少なくともこの一年間見つけて来ました楽しい夢、悪



い夢、苦しかった夢、そんなものはみんな猿にでも食わせてしまえと投げやってしまうには余りにも、いとし、かれんな夢ばかりで、言葉をかえて申しますならば、これからの将来の「川柳塔」全生涯を含めて、到底忘れ得られない思い出の夢としての、連続編の一年間だったと申せるのでございましょう。

そしてこの醒さしたくない長い夢を、これから迎えるこの歳も大切な心構えとして、いうなれば初心忘るべからずの信条としてゆきたいと念願しているのでございます。

昨年の正月も例年のようにたくさん読みました年頭所感の中で、今でもはつきり頭に残っているほど私の心をとらえたものが二つあります。その一は武者小路実篤氏が「あせってはだめである。ゆっくり、じっくり気長に勉強する事が大事である。それと同時に人はもう少し図々しいところが必要と思う。何事も思うようにはなかなかならないものだから落ちつく事が大切である」と述べられておりますことでございます。誰でも、いつでも言いそうな平凡な言葉ではあります。武者小路氏が、そして正月の所感として言われるから特に印象的であつたようにも思います。いま一つは立教大学の渡辺一夫教授の「偽善のすすめ」という一読奇異の感じがするような面白いお言葉でございます。「偽善とは、良い人間、立派な人間のふりをし、その仮面をかぶることです」と結論しておられますが「私がこんな妙なことを考えましたのはフランスの十七世紀の哲学者ブレイズ、パスカルのある考え方を思い出したからなの

です。パスカルは神を求めながらも入信できず「神とは何ぞや?」「神を見せよ!!」とだだをこねる人々に向つて、こう申しました。「善男善女の信者たちがするように、何でもよいから、祭壇の前にひざをついて祈る格好をなさ。何度も何度もそうしているうちに、神はひとりで見えてくるし、判ってくるようになる」と申しました。」とあります。武者小路氏のお話と渡辺教授の「偽善のすすめ」を並べて読み返していますと、これからの「川柳塔」の夢も、あせらず

怠らず、真つすぐ前む

きに歩みが続けて行くべきだと教えて頂いたような気が致しまして力強い大きな示唆を明るく与えて頂いた次第でございます。

一生懸命「川柳塔」の夢を育ててゆきたい心で一ぱいでございます。どうぞよろしくこの後ともお願い申し上げます。本年の年頭ご挨拶と致します。

×



コクヨ
便箋



中島生々庵選

岡山県 浜田久米雄

いのちある限り時計のねじを巻く

総入歯身体髪膚など言えず

年金の身に相すまぬ二日酔

あかぎれの手を息子らに見せず寝る

むかつ腹立つ晩酌はすこし足し

大阪市 河村瑞川

妻の病篤し

無理な笑顔してくれるな悲し

敬老の日病妻と共に居る

覚悟はしてますと妻眼を閉じる

よく食べてくれたと妻をほめてやる

タクシー来たらず寒い病院前に佇つ

岡山市 服部十九平

おみかんで祖母お年玉をとつてみせ

美女去つた席の温みに触れてみる

変らんのうと変つた同士が手を握り

蜘蛛の巣にかかつた虫を子が救い

結局は無駄に終つたプレゼント

青森市 工藤甲吉

足元の雑草はいう「俺を見よ」

いやはやいやはや泥棒はガードマン

マツタケのかおりどころでない値札

自称ではどうにもならぬ著述業

ダイレクトメールはマル秘などどくる

大阪市 正本水客

沈んだように重い歴史を歩く秋

顔ぶれへ熱燗にする手がうごく

新築成る

足場はずしてモルタルの壁秋を吸う

明日から はいれる畳積みあげる
掘ごたつ切つとく余裕とり戻し

米子市 小西雄々

金策へ行く自家用車とは知らず

人間を金に見積る額でもめ

母の手を引かずデートへ腕を組み

職務多忙(二句)

残業へ夕餉の話題もなく疲れ

無理すれば齢だと思ふ肩のこり

高槻市 傍島静馬

新米の夜警に前を歩かせる

へそくりは見やすいところへ少しおき

平服の案内無視したモーニング

神前で誓い家裁でも誓い

真向いに林立膝上十センチ

西宮市 若林草右

一坪がアルミで買える旧地主

串本にて

串本節本場できけばもの足らず

本州の南端という石拾う

なじめない入歯に舌は触れたがり

冷房完備只今故障中

倉敷市 水粉千翁

唇を噛む根性の意志表示

両親へ任す糸切歯がのぞき

まだ喋舌るつもりへ咳を二つ入れ

澄みわたる空郷愁のとどくとこ

ネジを巻き給え素直に動くんだ

枚方市 宮川珠笑

ご主人をお借りしている牌の音

左遷でもいいさスモッグから逃がれ

皆走る中を悠々義足行く

早よ発車して欲し義理に見送られ

天井が廻りはじめたのに酌がれ

大阪市 本多柳志

河内弘川寺吟行

西行のわらじの跡の排気ガス

柿をもぐ河内娘の紺がすり

西行墳

たてまつる華はさくらの木くらがり

合掌のしじまへ百舌鳥の糞が落ち

天然記念樹

かいどうの白さが庫裡を明るくし

竹原市 杉原愛鳩

一番端のシートに坐る孤独癖

負けん気がここでも運動会のママ

行末のはなしで酒の座がわびし
トンボの翅音きこえる程に秋が澄み
みの虫を残して冬の枝になり

奈良県 西 辻 竹 青

肅々と霞立つ中に弥勒堂
下手くそな僕のカメラに立つてくれ
世はせまし隣りへ昔義理の人
女女女真実は妻一人
ガイドにも旅の縁やとカメラ向け

京都市 松 川 杜 的

洛北小松寺にて（二句）
石仏の白さへ動かず赤トンボ
少将と小町を結ぶ石の坂
顔ぶれを見渡し焼香の順を立ち
豊作の事にも触れてバスガイド
一斉に塔を仰がすガイドの手

大阪市 不二田 一三夫

火元が家主だからこじれだし
ばくはアホやつたとほんちの恋おわる
神様のミス大安に大惨事
たべ方は隣りを真似て箸をとり

南区医師会・伊賀上野観光

十二月忍者屋敷のテをおもい

大阪市 市場 没食子

更衣室ベチャクチャBG服が要り
ド根生の根も落ちぶれて枯れかかり
バスに乗るさえも背高が気を使い
泣寝入りさされ平和な人にされ

大阪市 大坂 形 水

芋粥がこんなに美味いものを知る
相槌を打ちつつどなただつたつけ
怪嗜じり族を狙つて儲けてい
ゴルフ場の広さに街の子を思う

京都市 大 鶴 喜 由

飛機吞んだ素振りも見せぬ浪頭
歯が一本また一本抜けて秋
秋の雨小粒ながらもうつむかせ
膝頭つけた女の頼母しく

豊中市 戸 田 古 方

富士の旅

葡萄棚すかせば葡萄光らす陽
パレットも紅葉二合目三合目
富士はあるんだ頭の上に雲がある
光琳の富士になつて富士が見え

名古屋市 吉 田 水 車

赤旗よ失業の苦惱君知るや

貰えるものもらわにや損と列に居り
立ち飲みのズボンの筋がありません
寿のその達筆も春らしく

高槻市 若柳潮花

帰る気になつて角帯しめ直し
白鳥へ初冬の水は動かない

文化祭参加桜吾会より

毛振りする子獅子も拍手意識する
投げ節になつて廊の雀売り

大阪市 後藤梅志

日本人たろうとすれば孤児になり
バカになりましよう入門の課長さん
其のコツが分かり用心ぶかくなり

明治回顧

つつましく帽子を外す皇居前

児島市 本田恵二朗

すべり込みアウト終バス無情なり

うるささと可愛いさ混線させる孫

おつきあい細くて長くあたたかく

調査万端及第同士見合席

門真市 福島鉄児

スピードを落し白バイやり過ぎ

マイカーを持つて悲劇の人になり

腰低うしても頑固はうなずかず
いのちとは何かと思う歳になり

岸和田市 内藤きさ子

シャボン玉売り半日の肩が凝り

脂だらけのかしわ屋の借電話

迷惑そうな顔と見ぬいた久しぶり

五十円安い布地がまだたたり

島根県 藤井明朗

痴話けんか隣は面白そうにする

夕暮れへ銃をくぐつた鴨一羽

妻が待つ夕暮れの街に僕がいる

耳うちで聞く表情を見逃がさず

岡山県 直原七面山

酔つた振りして女から崩れ

肩寄せて時雨に頬を濡らす恋

出来た二人の素知らぬ素振り

磨かれた女体へ春の陽が躍り

大阪市 金井文秋

かんしやくにブレーキかける数珠にぎる

抱きぐせがついてもよいと可愛いがり

栄光をあせつて女墮ちて行き

岡山県 浜野奇童

遠足 (二句)

足並を乱してオートバイがすぎ
ハイヒール脱いでガイドも子に交り
太陽の匂いへ試歩の足を止め
遠慮なく酔うてここにも義理ができ

鳥取市 森本法泉水

真に受けられた冗談をもてあまし
恭々しくも風呂敷の裏をだし
散髪屋はげてきたのを心得て

佐藤首相の肅党

洗濯もせずに襟だけ糊をつけ

奈良市 宮口笛生

百姓はいやだと思ふ秋が晴れ
お父さんが教えた宿題違うてた
熱燭がおいしくなつた夜が冷え
幹事さん一番先に酔うて無事

鳥取県 清水一保

貧農のあがきに似る音脱こく機
収穫をせぬ先冷蔵庫が届き

知事さんとの距離も近づく選挙前
腹の出た方へ女給も来て座り

今治市 越智一水

無理いうて買った土産を子は食はず

長欠児暮らしささえる船に乗り
人情はよいが噂の早い島
橋下に住んで熱帯魚も飼ひ

大阪市 西出一栄

秋風が野立ての袖をふくらませ
秋深くヘヤースタイル変えて見る
見る度に色増す柳 地にとどき
仮縫へ時間がかかる肥満型

倉吉市 奥谷弘朗

昭和にも悪代官が居て哀れ
ふところが寒くて人出見てるだけ
横着の見本走つたことが無し
役付の手前割勘云いそびれ

松原市 小池しげお

耕うん機勤労感謝の日をわすれ

祝吟

羽ばたきの音もうれしい番鳩
返盃の分だけあくる日にこたえ
秋日和ふと体操がしたくなり

ハワイ 羽佐間柳葉

咳払い臆病者の護身術
口数が酒に吞まれて多くなり
新社員どちら向いても気が疲れ

頼まれた一票笑顔で受け流し

倉敷市 野田素身郎

勝つてはならぬ麻雀欠伸嘯み殺し

先がみえてきて息抜きを考える

姑の米寿を迷惑気に祝い

原因を知つて仲裁尻込みし

奈良県 木村十悟

セコとセコ金婚式のいい笑い

犬の散歩か俺の散歩か赤い太陽

腹据えてしまえば何の事あらん

血圧が二百妻はもう死ぬ準備

守口市 村田瓢太

赤い羽根お願いしますのピケライン

九輪の彼方は浄土なり夕焼す

九死一生得てから命惜しくなり

鳥取砂丘

可愛そうにと言いつつ砂丘の馬車に乗り

豊中市 寺田花宵

無駄なことひとつようせんのも哀れ

ほどほどに降る初雪はよろこばれ

ジェット機の音にも馴れて舞うトンビ

稲刈りへカガシ役割済んだ顔

大阪市 児島与呂志

実のらせて落葉に成つて散るさだめ

やりくつてやりくりをして地下にのび

お人好し又へそくりを使われる

追い込みがかかつて来たよな雨がもり

尼崎市 岡本昭三

いい年をして金策に走る破目

借りて来た知恵はやつぱり役立たず

オブラート破れてからのあわてよう

洋酒セツト揃えてからの病いなり

神戸市 小浜牧人

夜のひとりせめて明るく灯を点し

降る落葉手術の古い傷痛む

愛妻へピンクの真珠旅終る

野仏と遊ぶ雀は睦まじい

出雲市 中川晃男

それとなく店主聞いている赤電話

合わせ鏡女の執念もて余し

ささやかに古老支える村祭

郊外の錦を裂いてハイウエイ

小松市 関戸宗太郎

おつきあいデモを小雨で中止する

犬さけた事故へ救急車が走り

トランプがままにならない寂しい日

毒舌が冴えず血圧案じられ

芦屋市 丸川 初甫

敬老会へアクセサリーの杖を持ち

下積みは禪の修行もする社則

同僚のよしみ財布の底を貸し

叱かられている手は兎も角も重ね

熊本市 楠田 英子

散る気配ちらりとみせてつた紅葉

理性ふと我が口許を固くする

立読みで今宵の献立きめてきた

白秋生誕地柳川にて

白秋の恋うる故郷の地を歩き

富田林市 川端 東雲楼

立ち読みで下の五文字を仕入て来

喪中欠礼生気の抜けたお元日

高野山にて

雲の峯つづけと高し杉木立

宿坊の美貌の僧のすだれごし

新居浜市 近藤 凡生

倫落の目にも秋空青く澄み

油手止めフット冬眠したくなり

何もかもおもしろおまへん雪模様

刈り終えて田圃の月へ腰をのし

大阪市 天正 千梢

ふところに合わぬ売り地も見に行く気

非行の子さとすが如く菊づくり

一とまわり下の女房にだだをこね

木枯しへ別荘の窓しめたまま

岸和田市 植山 武助

こそばゆい気持只今父となり

持て余す命のようにスラム街

同期生の友死す(二句)

遺言状新たな涙又にじみ

アルバムの君の写真が皆笑い

和歌山市 野村 太茂津

寸借りをされて愚痴り乍ら褒め

女房の几帳面浮気したくなり

街静か貧乏人は早寝する

未舗装の街にも同じ雨が降る

岡山市 藤原 秋月

首吊りを忘れたように柿が熟れ

加えても掛けても取り得のない私

算盤をはじき独身主義であり

夕焼けを見て色盲は何思う

高槻市 山田 季賛

真直に帰つて妻に笑われる

突風が工事現場をあわてさせ
振り出しに戻つて書類のしわ伸ばす
内職の妻へ残暑の窓を開け

大阪市 宮尾 あいき

隣人養老院入り（二句）

養老院入りに美髯をそり落し
養老院へ帰る姿が目に残り
雑草の花咲いてから認められ
長持ちをして活花あきられる

玉島市 井上 旭峯

貧しくも清く牛乳壘の花
ノックしてあとが何んだか怖くなり
言い敗けて戻ればその夜の月斜め
手料理と一緒に若妻引き合わせ

鳥取県 森田 布堂

身よりなき老婆いくさのことにふれ
天皇の手套眩しい植樹祭
また事故で来たかと閻魔多忙なり
庭園で茶室に向ける石の顔

大阪市 水谷 竹莊

あいさつがすむまで鯛の眼を見つめ
くどかれてみたさにわざと酔うてみる
恋よりは金と女の貯金帳

鍋料理二人でたべてこそうまし

出雲市 尼 緑之助

食堂の隅を遡んで女の子

又一人負けて出て来るパチンコ屋

K君の死

今夜からひとり うまの合つた酒

加賀市 那谷 光郎

踏み台がぐらつく打つ釘又落し

血圧も上るよ肩書多過ぎる

余技の画はほめてくれたへ進呈し

大阪府 西 いわを

削つても鉛筆同んなじ色で出る

おいしい言葉に餓えている自分

ちぐはぐな心煉瓦の肌ざわり

下関市 桜川 不水

豊年万作かがしも踊りたいポーズ

メス猫に慕われている独り者

責任を果して柿の葉が落ちる

岡山県 大森 娘 句楽

信仰の貴くも見え可笑しくも見え

古くさい鳴子へ雀逃げ残り

お名残りに咲くコスモスへ野風吹く

岡山県 田村 藤波

新緑のいつかは土になるさだめ

祭り客に来て桶刈りに来てくれず

眉一つ動かず肚が読みとれず

大阪府 早川 清生

日本中耕し九千万が食う

ある夜 わが家のピエロめく俺も子も

おはなはん見ぬ妻 母とうちとけず

倉敷市 木村 千容

敬堂翁胸像除幕

いすまいをただし常座につきたまう

なに語りたまうか像の唇うごく

老残の処生座右

長空の白雲ゼット飛ぼうとも

鳥取市 河村 日満

この人も親戚の端計で出合い

肩書きへ焼香の順繰り

どうせさせられる寄附ごちや言わず出す

防府市 弘津 柳慶

ボンコツであろうが念願の自家用車

賽銭を投げず柏手だけにする

天井を見ながら受話器返事をし

大阪市 山川 阿茶

ひと盛り背鰐は箱で欠伸する

田地売りクラブを振つて米を買い

忍若屋敷

からくりはこれやこれやと人の寄り

熊本県 有働 芳仙

調査してお答えします黒い霧

腕組んで夜を探している歩み

バツクミラー家族の笑顔のせて発ち

大阪市 橘 高薫風

明治百年蹄の音は消え去りぬ

川上三太郎先生 紫綬褒賞受賞

菊爛漫川柳あとで芽をふきぬ

髪梳けり女は知恵を研ぐように

青森県 木村 涼人

文化とは田圃も油臭くなり

天を掃く木立の音も北の曲

秋来れば秋に追われて恙無し

笠岡市 木山 遠二

齒科へ来て齢をかくせぬ口を開け

うちの猫生花へ来て水を飲み

枕辺へ本が散らかるほどに癒え

大阪市 田中 十方

押し込んで後から乗るのを押し返し

開業三周年ただ飲ますとは書いてない

団地住い隣りの菊をほめられる

大阪市 河井庸佑

教育ママはつてますのとききり

教育ママ

百点が半分もいてくやしがり

もう少し伸びるはずの子伸びなやみ

玉野市 小谷仙山

泥水も相手にせねば清く澄み

でこぼこの道が自然の理に適い

同じ木になつても柿の良し悪し

大阪市 神谷凡九郎

宿命がリモコンの先握つてた

いつわらぬ鏡の性を嫌悪する

守銭奴のその片隅の人間味

笠岡市 木山要次

倦怠の撚りが戻つてゐる微笑

衣食住足らず秘密のないくらし

入浴にこそばい孫の肌ざわり

富田林市 浅川八郎

逝く年を追うたと響く除夜の鐘

ししま衝く宮司の祝詞に歳が明け

いい加減に白状しろと取り持つ気

大阪市 米虫一乃字

ゆすつてるように小遣い貰つてる

気の毒な程にモーニング酔うて居り

空き腹で来いと嬉しい電話なり

大阪市 森本良夫

相手から電話かけさす子にも知恵

友の死

柱時計十打つ下で悲報聞く

全日空機墜落の悲報

松山沖この方向か合掌す

堺市 青山慶之助

指十三本あるよに見えるピアノリスト

大望を世間に小さく養なわれ

かと云うて貸したるだけの金はなし

明石市 家沢薺花

ボーナスの明るい予想きくラジオ

今日もまた秋刀魚かと云う顔に詫び

空堀に挿すとあわれな菊の花

ハワイ 築山快夢起

十一月三日明治の御代のなつかしや

松茸の香りに故国の秋思う

結局は運だよ君と割切つて

京都市 都倉求女

寝言にも嫌やいやと反抗期

棚を吊る長さも夫婦で相談し

亡父一周忌

南天を植え終えた墓夕焼ける

大阪府 谷 沢 好 祐

冷戦中他人行儀の返事来る

怒るとは知りつつ母は念を押し

顔色を見てから犬もジャレに来る

大阪府 中 島 小 石

ぬけ穴もあつて忍者の屋敷跡

尼僧一人紅葉の寺のただずまい

山菜の味かみしめる山の寺

大阪府 石 倉 旅 風

路郎師を憶う(二句)

あの時に手を握らせて欲しかった

一周忌ようやく悲し雲の峰

名月を拝みに一丁ほど走り

岡山県 横 山 一 声

十二月ガソリン入れるのも忘れ

一年の計崩れたままに十二月

十二月頭を下げて越すにきめ

竹原市 山 内 静 水

折角の義歯が我慢もうならず

信じようされど相手の目の動き

一家団楽妻は無心に灸をすえ

宝塚市 小 島 無 聖

寝ながらに腕細りゆく裏おもて

野の花の夜露に開くだいたんさ

鏡へと笑えばニヒルな顔になり

大阪府 福 井 野 迷 路

春琴が心の鏡で見る佐助

死後までも墓の広さを誇り度い

三部経 はいそこまでともいかず

岡山市 江 国 幽 谷

植木屋で見て来たとおりに枝を切り

情報 of 洪水分析機がほしい

洪柿がこんなにきれいな色で熟れ

兵庫縣 磯 野 与 志

飽き性でなけりやと思う腕の牙え

かつぽれを踊る約手も落ちぬまま

手拍子へ園児まつすぐ腕を振り

愛媛縣 渡 辺 曉 童

火の国旅行

とよあしはらみずほの本場稲を刈る

ハイウエーワイドでみせる秋錦

神戸神宮太平洋よちとさわけ

鳥取縣 渡 辺 乱 坊

自動車免許実地試験に妻落ちし

六度目は泣いて戻つて拗ねるなり

遠廻りして落葉踏む出勤時

人の子を抱いて一刻夫婦の子

呉市 林野甦光

それぞれのコツプ職場の昼和み

頬赤く凍らせ新聞唄で来る

魚拓背に父の自慢も松の内

兵庫県 河原みのる

骨まで愛してネと喰われける

日本の鯉力ナダ小麦の麩と知らず

再び箕面の滝にて

孝養の滝へ社長と女秘書

大阪市 中川滋雀

刺のあるお世辞でニツコリ迎えられ

消火器の期限忘れたまま飾り

お祝の中身で妻と溝が出来

笠岡市 松本忠三

通勤を五分早めた片思い

戒名を賞めて坊主へお茶を注ぎ

社長より秘書がぶつきらばうに言い

布施市 本多清人

面接へ予定増やした粒ぞろい

先生に喰いつく教育ママの意地

セールスは遠縁まででゆきつまり

大阪市 吾郷玲人

熱っぽい沈黙となる恋ごころ

溜息をふつと洩らした化粧室

終列車尾灯ひときわ赤く見え

堺市 高崎雄声

故郷の我家に見知らぬ人が住み

後ろ鉤へそ曲りのように見え

娘結婚

何気なく娘の居た部屋覗いて見

神戸市 仲 どんたく

要するに飲む会 恩師を囲む会

人生のゴールへ鐘が鳴る鐘が鳴る

パイパイを五人がかりで教えこみ

香川県 三井酔夢

怒りとは淋しきものよ友を打つ

嘘とうそ家庭平和は乱されず

偽善者よ犬あわれみの目で答え

高知市 川竹松風

妻に云い負けてブイと街に出る

悪友のお世辞妻の勘にふれ

スリもどうぞデパートの自動ドア

大阪市 宮地 双楽

徳たかき余生の胸に菊の花

ストープの前で思案が居眠りし

よしよしと云うが金策たよりなし

兵庫県 遠山 可住

もう一度産む気になった煎じ薬

浴衣着の肩の辺から秋が来る

人生を逆さに歩いてる夜勤

平田市 久家代仕男

赤い嘘話のきめが細かすぎ

神妙に名札をつけて新課長

隙だらけあれでつけ入る隙がなし

伊丹市 小川 静観堂

百万円いいワとダイヤの列へ入り

黒い霧で迷える羊また迷い

答弁は露は尾花と寝ぬ程度

大阪市 本庄 金三

方言でからかうようにする司会

干物をまた出す日和へ虹がたち

銭湯へ行くのを明日にした茶の間

大阪市 賀本 昇

淡水も一緒にすする夜泣きそば

隠し芸トイレへそつと避難する

共稼ぎ夫に負けぬ酒の量

加賀市 木村 一路

入院初日

潰瘍が痛まぬ午後の退屈さ

病院の十二時僕の呼吸だけ

寝付かれぬ耳へスリツパ遠去かる

出雲市 原 独仙

よく孕む豚だと産まぬ嫁想う

サザエさんのようなのもいて娘が四人

老妻のすべてに飽きた寝相なり

愛知県 伊丹 阿喜良

せつがちが思わぬ難を背負い込み

はすかに女の足は座席とり

餞別を貰いに行つたようになり

富田林市 岩田 みよ

しみじみとすがれる膝がほしい秋

こだわりが取れぬまんまのお茶を入れ

おきかえて先方の立場見るゆとり

新居浜市 安藤 桂仙

すり切れた夫婦無言で茶をすすり

俺が先き私が先きだと死にたがり

思うまい五指にもあつた長が短か

新居浜市 小林 孝正

誤解まだ解けず気まずい朝を食べ
ペコペコペコこれも生きて行く道か

星空が私の酔いについてくる

奈良県 草深醉升

月五分に釣られて元も子も取られ

秋深しゆうべの虫はもう鳴かず

バスガイド京都に入れば京都弁

大阪府 室谷鉄舟

信号機子供の方がよく守り

虫好かん益が来る床柱

守つてゐるルールへ調査よそ見する

宇部市 平田実男

仏間から俺に聞かせるひとり言

歯ごたえで雀も豊作だと感じ

逆転が続き神様信じ出し

美濃市 安平次弘道

やましさをかくす笑顔のきこちなさ

初霜の田へ先登の鶴が着き

口べたが先になぐつて損をする

守口市 羽原静歩

北浜の裏も知つてて買いそこね

雑魚ばかり釣つて帰りの遠い道
ボンコツのように熟柿落ちてくる

姫路市 隠岐不酔

猫の手もほしいと言うに孫の守

顔にしわ口紅つけて眉をかき

喜の祝よし米寿まで生きてやろ

愛媛県 村上旭童

忙しい一年だった麦をまく

品質でいけと蜜柑の値にふれず

谷の田をつぶして道路山へ抜け

堺市 田中狂二

ウナ電にのつて初孫誕生し

先祖の名次々くつて子の名付け

生後五十日にて孫帰郷

それ見てみ笑うた笑うたと孫を抱き

鳥取市 藤本礎山

承知していますと女将金をとり

玉葱の涙と知らずギョツとする

学校寄附どうせ出すなら笑顔添え

和歌山市 土谷城石

バスの旅トイレの予約して走る

身に合わぬドテラ平気で旅の夜

柔道宿のドテラで社長格

へそくりをそっくりはたき老婆の旅

和歌山市 西尾義一

妻病みて鏡に写る不精髭

吸いがらを山ほどためて妻の留守

八代市 永松道雄

寄附金の裏から選挙が顔を出し

借金が俺の半生追いまわし

気持よく飲ませ遊ばせふんどくり

松江市 小林孤呂二

臨時さんすこしは馴れて電話口

日悪日総理まだまだ続きそう

岡山県 池田古心

土地の差は反収五俵で豊作だ

爺ちやんはトイレ煙草の煙が見え

米子市 石坂新雪

腰曲げて里の祭りにゆきたがり

出雲弁おかしい内になじまれる

大阪市 村山光輪

振袖で学生らしいお茶をたて

亡き母にいた人も居て長寿会

大阪市 今西章雅

絵の前で首振つて置く審美眼

ああ云えばこうすれからし手を焼かせ

大阪市 佐藤甘草

席譲る人の心に感動し

日本もアメリカ並みとはプロ野球

小松市 馬場魚山

特急をどん行にする上り坂

団体が占拠している食堂車

京都府 清水谷句楽坊

唯物論おさえて拝す初日の出

書初めは七十九才の道標

兵庫県 大江秋月

事故現場腕組んで見る他人さん

お隣りへ越境の柿に陽がそそぎ

松江市 柳楽鶴丸

停年が妻の座にもあつたとは

養老院へゆく気で金をためたけど

普通寺市 岡田拳法

どうしても右へ行きたいだから行く

なんともめかせとダンブつつ走り

福岡県 太田湖平

山家とは蚊の訪れる神無月

本物を売りに出しても寺は寺

大阪市 川口弘生

予算よりチップが減つて妻の旅

こまごまと云い置いて妻旅に出る

泉大津市 高津徹也

新米を喰う素朴の顔ばかり

手編み急く くさめの一つ咳一つ

岸和田市

葛城伊三郎

酔ざめの水はやつぱり妻でよし

捺印をしてからひよいと胸さわぎ

和歌山市

二越俊爾

死神は前から切符買つて置き

テレビ見てどれをのむかと風邪薬

加賀市

細呂木魯木

日曜日朝から妻の指揮に入り

遠のいた友は出世しすぎてる

泉佐野市

大工睦夫

放つとかれながらコスモス潔く咲き

嫁の帯満足そうに締めてやり

三次市

和泉松風

結婚の写真へ親は話し掛け

駅にある紅葉便りで秋深く

★

北川春巢

自転車は歩道を走るカーラツシュ

手に巻いた繻帯またたく間に汚れ

根が腐つてるに素人水をやり

白浜温泉出張(二句)

飲む芸を買われ白浜まで呼ばれ

たんのうするほど蜜柑を見せて汽車走る

西尾 栞

お骨あげ丸いものは何コンパクト

母逝きて七日の鐘の冷えてくる

陽気なおばあちゃんやつたと一ト七日

満中陰音痴のテープ母の歌

覚悟とは別に七日七日の淋しさよ

若本多久志

六時には眼が覚める癖古稀近し

貰うまではと集金逆らわず

覚えとくれやつすと仲居名をつける

揉んでみて値切つて女服地買う

年の暮今年も豊かえられず

菊沢小松園

背を向けて拗ねた襟足と室よし

ネジ巻いた数だけ動く人使い

銭亀が好きで無口な生れつき

千羽鶴うちの一羽の糸が切れ

カーテンで涙を拭うほどに慣れ

松江梅里

祝結婚(二句)

共に咲くこのよろこびをわかちあい
これからは二人で築くプラン立て

整理券もろてダイヤに列ぶ見栄
雲行きへ美妓のお酌で座がなごみ
手を放されたことを患者は知っていた

清水白柳

甘えたいので逆のこと言つてみた
先生の眼を意識して下を向く
ちり鍋の魚は白く煮えつまり

一九六七年新春

孫泣いてわが家の春を豊かにす

川村好郎

食膳に掌を合はすここからの生活
さて買つてやれば妻はしまつとき
悔もなく暮した夜の雨戸閉ず
招待席あくびしていたのも拍手
妻のるす帰る冷たい鍵握る

本年のご活躍を祈ります

中島生々庵

国立公園 浦和歌新奥

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山(44)0431・1186(代)
大阪案内所(641)3564

風光明媚な
海岸美を
誇る

生駒から

—不二田一三夫宛

麻生 蔑 乃

十二月号ありがとう存じました。いつも目先きをかえた編集、

ご苦労のことと存じております。

「川柳とは何か」は絶版になっているので残念です。「新川柳鑑賞」はまだもうすこしあります。

家沢齊花さんが川柳塔社の同人になられたのはうれしいことです。永い間、消息をたっていら

ましたが、この人は「川柳雑誌」の一番大判の旧号から新刊までを

短日月で読破され、何カ月もたぬ間に異彩ある作家になられた事実がございます。永い間作句をやめていられたのは惜しいことでしたが、これから再び活躍されることを期待しております。

清水白柳さんが杉原大研子さんのことを書いていられますが、大研子さんは珍しい時計を集めていられたことをおぼえています。

私は大研子さんの「あやめの色紙」を持っています。

—十二月五日。

大阪市 橋本 緑 雨

南紀めぐり

熊野川奇岩ばかりでおしまれる晴れの日に瀬を写した美しさ

紀の松島

松島で右と左を見る忙しさ

小松市 山上 千太郎

お朔日詣り光った硬貨より

鉢に水やったり石を磨いたり
墨の香に終日没って富むころ
じじむさくなりたくはない一万
歩

和歌山市 秋月 宏方

使いなれた道具その名は妻とい
う
うなれば僕は人生負け投手
旅の朝西の空から日がのぼり

川俣柳 初篇研究

(四十三)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 故 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

糊をふりかけさせ水をあびてくる

車 弓

高須「この句は『師走油』の句である。十二月に油をとぼすと、火にたたられると言つて水をかけられた。それでまず油をぬくため糊をふりかけてもらつてから、水をあびせてもらったのである。

岡崎「贊。師走または寒中に油壺でもこぼせば、お詫びにたとい三滴でも水を溶びぬと火にたたられる。糊をふりかけさせたのは、油を吸収するからである。

藤井「寒中の油こぼると火にたたられるとは知らなかった。それで了解。

丸「贊。

岡田「同。当時は奇妙な迷信多し。

田「艾ついで灸きやうに草双紙 三 朝

高須「またしても判らぬ。『灸きやう』なるコトバ、何を調べても出て来ぬ。無理に解すとすれば、ヨモギの葉を干して艾を

作っている、そのついでに「ちよつと灸を一つすえてもらおうか」と、日向縁で草紙を見ている隠居に頼まれた灸点をしたではどうであらうか。

前田「『灸きやう』は『灸養』女子供に灸をすえる時、あつさをまぎらわせるために絵草紙を見せたり、灸養を食べさせた。灸養は豆と干飯等をいって黒砂糖をまぶした菓子である。豆いりともいった。この句豆いりのかわりに絵草紙を見せているのである。

岡崎「前田説贊。灸養は出血を止めるために食べさせたという。

清「灸をすえるためにモグサを取り出しながら、あつさを忘れるための道具である灸養と草双紙をついでに用意してやったのである。

丸「同。『やいとぎやう』は『ぎゅうぎよう』ともいい『灸行』とも書いたやうで

ある。

岡田「同。

田「姉さんと坊が居るのと鏡ミセ 一 甫
高須「まだ鏡というものの珍しかった時代、弟が鏡をのぞいてビックリして姉に言っているであらう。『そりや坊さんが居なさると水鏡』(一八・一六)の姉妹句。清「子供が言っているのではなく、姉の方が鏡を見せながら話しかけているのである。

藤井「『鏡みせ』だから、姉が子供に鏡を見せたので、従つて清氏説たと思う。

丸「同。『坊さまと姉があるよと鏡架』

(管一・30)

と同想の句もある。

岡田「同。鏡が珍らしいのではなく、子供をあやすのに、いろいろな手を用いるのである。

44 氣がるな花嫁式度めと評が付キ

前田 〓「氣がるな」は現代風にいつて、ひらけている、さばけているのたぐいなどころ。あの花嫁はひらけているが初婚ではあるまい二度目であろうと、批評がついたの意であろう。「二度目には三年ものの女房なり」(二三・23)「ぬか味噌をきたながらぬは二度めなり」(九・12)

岡崎 〓嫁は羞恥心が身上とされているからである。

清 〓贅。花嫁に関する句は、そのすべてが羞恥心を詠んでいるといつても過言ではない。また事実そうであつたらう。

藤井 〓深川の木場あたりの女房ならともかく、一般の嫁さんだとかくこんな評もついたらう。世間はうるさいもの。

高須 〓「氣軽な」は「きさくさ」という意味で、羞恥心がないというより、いろいろ仕度をして来ないの意の方が強い。だからサバサバとして来た花嫁だから、あれは初めてではなく二度目だろうという評判が立った、という句である。

丸 〓氣軽な高須説の如くとするが、羞恥心は底に隠れている見た目には羞恥心がないようだ、そこで二度目と評がつく、磯橋の通りでよいのではないか。

岡田 〓同。

450 こいつふるとみたらバ手を付ケベからず 泉河

前田 〓この女相當な強もの「こいつ手を付けるべからず」で会話的な手法が面白い。

岡崎 〓贅。振られたら色男のコケンにかかわる。

清 〓贅。「手を付けるべからず」は、何かの文句取りではないか。

川端 〓贅。「べからず」申すまじき事」と、当時の禁句のこと。

高須 〓この句總体が文句取りであらう。女郎買の巧者。

丸 〓贅。單刀直入。「べからず」は川端説の如く禁令の慣用。

岡田 〓「一押二金三男」はむかしの求愛の常法(現代のように忙しい時代には「一時二押……」と、くどくヒマの少ない人間はダメな由)であるが、この句では「一押」を無視して、ダメと見たらだちに手をひつこめる……とある。この句は普通の恋愛でなく、高須説の女郎買の場合が正解。

451 根生のわるいか、アと濡れて来る 秋江

前田 〓「濡れ」は男女の情事にとれそうであるが「根生のわるい」即ち疑い深いがあるから、傘も借らずに雨に濡れて来るのであらう。

岡崎 〓外出先で雨に降られた。行先も判

っているのだから迎えに来てよよかりそんなものだ、ほんとに女房の奴根性わるだ——と濡れて帰る。

清 〓岡崎説のようにもとれるし、また傘を借りによつた家の内儀が根生がわるくて傘を貸してくれなかったともとれる。「かゝア」という場合は、すべて自分の女房を指すのだからうか。

藤井 〓「かゝア」と一語に濡れてくる」とと解すと相合傘ではなからうか。女房は根生悪だから自分だけ濡れまいとしているので御亭主は名ばかりの相合傘ですっかり濡れてしまつた。これを見て第三者の句。雨降りでは、たいいてい骨ばかりの傘でも借りてくる。傘持って迎えに行く女房はあるまいから不人情な女房との相合傘と思う。それともこの女房、根生わるなので雨性かな。

川端 〓清説に替。雨宿りしている家の女房のことで「お前が本降りだにと邪魔がられ」(八・26)「本降りになつて出て行く雨やどり」(二・35)「うまさうに食ふを見て雨やどり」(二三・7)追い出された上空腹も加わつての立腹であらう。

高須 〓傘を貸してくれない友人の女房を罵つて言つた「濡れて来る男のフンマン。句意は、友人の家へ駆け込んだが、傘は借りられず濡れて帰つた。

丸 〓清説後半替。「道理で嫁が無え苦と濡れて駆け」

岡田 〓同。

西宮市 若 本 多 久 志
仁王さんあぐらをかいてみようなり

護法の為とはいえ、千数百年間も同じ姿で立ちつづけている、俺の身にもなってくれ。一ぺん位、あぐらかいて休みたいわい。

岡山県 直 原 七 面 山
大火事へ村のポンプは修理中

東京のNHKからラジオで全国に放送され、大好評を博するとともに、一番初めに金になった記念すべき句である。

今治市 長 野 文 庫
仏壇へこめんなさいね恋進む

昔は「貞女二天に見えず」と云ったが、今はそうでない。併した何となく気が咎める点があるのかも知れない。

諫早市 川 岡 靈 眼 子
ある時は毛のない事も訊ねに来

恥毛の無い事千里眼の私に生える方法聞きに来た。古生妻と黒胡麻の秘伝を教えた。四カ月で生え本人の喜びより私の方が万歳を挙げた。

大阪市 今 西 章 雅
腹へ目を落し腹帯うける列

安産の腹帯を夫と連立って享けに来ると同じような人がいる、いる。お互いに腹へ視線が行くが目やりばは自分の腹よりない。

岡山県 藤 原 秋 月
賞品授与もらえないのは去に仕度

昭和38年1月のある大会での作品。これは「去に仕度」をする側から詠んだ句でこの日も私は入賞せずはやばと帰途についた。

鳥取市 河 村 日 満
恋なんかしなかったわとまだだし

今日なお、女房殿はこうに言っております。主人である私は、それを種に、ときどき彼女をからかっております。

鳥取県 森 田 布 堂
前歯一本抜いたとマスク取って見せ

父「おいおいいつまで笑うんだ笑いごとじゃないんだぜ」。妻、「だってパパの人相まるつきり変ってーおかしいわ気の毒じゃけど」

善通寺市 岡 田 拳 法

よう金があるなと擦った話聞く

ギャンブルは穴を当てるのは他人で、普通は、買わぬ予想と、バチが当るのがオチであるが、簡単にはやめられないものである。

児島市 本 田 恵 二 朗

剃りあとへあらまあババはヘアオイル

いやにベトつくなと思わぬでもなかったが妻や娘に吹き出されて貴録丸つぶれである。乳色の頭髮油など発売禁止してもらいたい。

今治市 越 智 一 水

お見舞の菓子を見舞の客に出し

十三・四年前、NHKラジオ文芸で何百かの投句中、入選第一位で伍健先生にほめられた句、文庫先生にも雑誌ではめていただく。

富田林市 浅 川 八 郎

早合点公益社にも電話かけ

川雑本社句会若本多久志選で路郎師はじめ皆さんからバク笑の榮に浴したもの。

大阪市 室 谷 鉄 舟

腰据えた客へまじない効き目なし

ずばりそのもので説明の余地ありませんが、現在でも未だ何処かに生きているみたい「まじない」も一種の気休めだろうか？

倉敷市 野 田 素 身 郎

元旦も子供やつぱり泣いて起き

この子も小学校一年生。正月が嬉しくて早く起きるようになった。そして、休日には朝寝を楽しみたい共稼ぎの私達を脅かす。

大阪市 後 藤 梅 志

朝顔のつるも明るい方へのび

丹精した朝顔も、なかなか庵主の自由にはならず、陽の当る方、明るい方へと延びて、はては、垣根のそとへ出てしまうのである。

守口市 村 田 瓢 太

無駄使いするじゃないぞと親爺飲み

どんなことを決めても、お前らは守れ俺だけは別と権力や地位をかさに弱いものに押しつけ、いつの世も力のない者が馬鹿を見る。

大阪市 本 多 柳 志
天下り履歴書程は間に合わず

「元署長の顔で陳情してくれんかね」「それがその陳情をうける方なら別ですが、する方はどうも」「君辞めてくれ給え」

大阪市 天 正 千 梢
名画展皆んな分ったような顔

ピカソだミロだと名画展が開かれると、目や手が三ツ四ツあったりする画を、さも理解出来たような顔つきでうなずいている風景。

宝塚市 小 畠 無 聖
優越と悲哀でのぼる電線夫

正月だというのに停電修理とはつまらないなア、またよ俺がこの電柱の上で修理してやることで町内が救われるのだ。やったるで。

兵庫県 磯 野 与 志
鳶職へビルの窓から投げキッス

思いがけないBG達の仕草に、若い鳶職、嬉しくなつて、高い鉄骨の頂上で、シエーをして見せる、アドバルーンもほは笑むよ。

大阪市 金 井 文 秋
退院が近し慌てて見舞に来

近く退院するなら見舞わなくてもよいものを、入院中に見舞に行かないと、不義理のように感じるのが人間の弱いところでしょう。

ハワイ 築 山 快 夢 起
お見舞がはや折伏と云う構え

例の創価学会がやって来た最初の親切な見舞言葉は忽ち折伏の構えとなり、こちらから最後通牒を出すまで頑ばられたには閉口。

ハワイ 池 田 泉 水
喋ってて買物忘れたまま帰り

マーケットへ行く途中田友に会い話して居る内、頼まれた品を忘れたまま帰り妻からさんざん油をしばられた、年はとるまいものだ。

下関市 桜 川 不 水
禿と白一別以来二十年

クラス会を二十年振りに開き、お互に禿と白を称え合い、宴酣にして此の句を発表、ヤンヤの喝采を博した事を附記します。

同 人 作 品

富田林市 川 端 東 雲 楼

お年玉ママに預ける手に乗らず

摩太郎先生句評、何でも無い句だが、お年玉をめぐって、ママと子とのにらめっこ、誰しも味う正月風景の一幕マ、新年句会市長賞。

松原市 小 池 し げ お

ホテルから帰り英語でものをいい

日本製英語にナイターと云うのがある。防水材料に「モラナイト」というのがあった。ホテルは一流？だが英語は日本製でした。

岡山市 服 部 十 九 平

席順を禿けてる順にして笑い

十九平も、トク平、禿平なのである。この句は豆萩が自分や私を光頭の三光に選んだときのものである。

高槻市 若 柳 潮 花

隣席のヒップに袂おさえられ

職業柄和服で出かける時が多いので、よく車中でも袂の上にお尻を置かれるが、それもドスンとかける中年の色気のない女が多い。

和歌山市 野 村 太 茂 津

地下鉄に尻さえ入れればしめたもの

ラッシュ時に見かけた悲壮なうちにもユーモアのある情景の実感であります。これは女の人であったことを附記します。白柳先生選。

鳥取県 渡 辺 乱 坊

幽霊がサン格拉斯して歩いてい (漫画本から)

40年8月作。思わず吹き出してしまい、はてと考える。それ以来サン格拉斯して歩く男女をみると幽霊を思い出して笑いたくなる。

岡山市 江 国 幽 谷

ポリさんの手前で無免許引返し

ポリに態々つかまるようにあわてて引返す。顔色を変え、あわて、すばやい行為ではあるがそこはポリさんも本職ピリピリと笛を吹かれる。

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

一票の差で人の世に距離が出来る

選挙風景である。有権者のただの一票の差のために、一人は州知事の栄職につく者と、一人は一市民としてとに残される。

同人作品

高槻市 福田 丁路
初孫を抱いて漫画の顔になり

可愛い初孫を抱いたとたんに、烈しく泣かれまだ見えぬとは知りながら、思わず百面相であやすおじいちゃんの顔、御想像を乞う。

兵庫県 丸川 初甫

お料理もしますとアイシャドー笑

テレビの山田五十鈴、嵯峨美智子の親子対談、この人はお料理は上手です。カラカラと笑う嵯峨のアイシャドーに見とれて。

大阪市 吾郷 玲人

オヒップが邪魔する婦人消防隊

出稼ぎの村を守る主婦達は、手押ポンプを繰出しての消火訓練、そのいでたちは壮観(?)であり又ユーモラスな姿ではある。

ハワイ 田中 万里歩

門踏めばがさり枯葉の音がする

布哇在住五十年近く古稀を迎えんとする。足跡を振り返れば枯木も山の賑わいの如く此世で唯一本の枯木の役をつとめたに過ぎない。

和歌山市 中筋 三幸
舞台済み奉行と忠治が湯に浸り

幕がおりた。
追う人と追われる人が、
仲よく客の入りを話している。

京都市 都倉 求女

日本髪結うたを神様にも見せに行き

柔い新春の陽さが境内を包み、その下には晴着娘のオンパレード。全く男性の影は薄い。だが皆様くれぐれも晴着魔に御用心の程。

出雲市 中川 晃男

パパ会社坊や学校ママ昼寝

旦那様や坊やを送り出したあと電気掃除機、洗濯機で手早く家を片付けたママさんはテレビを見たり近所を廻って話し込んだり。

青森県 木村 涼人

税務署を待たせてお釣り間違えた

急に「帳簿を見せてくれ」と現われた税務署員を待たせて慌てる小商人の気持……
別に二重帳簿も無いのだがネ……

防府市 弘 津 柳 慶
何処をどう廻って来たか屠蘇機嫌

昭和十年独身時代の作句。独身の気易さから、飲めるあての四・五軒を廻って足もとも危く、ふらりふらりとよき御機嫌。

高石市 谷 沢 好 祐
これでまあ昨日帰って来た背広

前帝化句会の題吟「慰安会」で「天」好きな上に酒に飲まれる性質を有する私。昨日の背広は泥だらけ、宿酔の頭に妻の叱言が響く。

大阪市 山 川 阿 茶
ラッシュアワーわたしのお乳房何処へいた

おっぱいエレジーです。整形のため死んだ女性さえある。肩紐のないブラジャーをしていた借り物の乳房は背中へまわっていたそうです。

大阪府 清 水 白 柳
母の手からひたたくってうしろにかくす

その隠したものは点のあまり良くない通知簿か、恋人から来た封書か、それはどちらでもよい、その動作にユーモアを感じたのだ。

岸和田市 内 藤 き さ 子
古稀らしい魚も交じった水族館

子供の頃水族館の大きな魚を見るたびに、くたびれたウロコにモラモラがついたのを見ると、この魚おじいさんだなとよく思った。

出雲市 原 独 仙
友情のああそれなのに線を越え

幼な友達で子のある未亡人と越境して悩む彼の情事を纏めた時の句。その彼は今は村の重要ポストに納まってご座る。

香川県 三 井 醉 夢
ブドウ酒も駄目かと医者にくい下り

悪女の見本かも知れぬ。小量だが三百六十五日欠かしたことの無い晩酌を慢性胃災とやらに、禁酒宣言された当時の哀願は空し。

鳥取県 清 水 一 保
一票は呉れず演説ばかりほめ

満員の聴衆を前に得意の名調子。立派なスローガンに美辞麗句、思わず起る拍手の嵐、然し開票の結果は期待に反しお粗末。

L・B・J手術で株式跳ね上げる

ホノルル 市 岡 曉 舟

「青くなっていたウオール街も、大統領の手術上首尾、跳ねるは跳ねるはダウ平均八百二十二弗、ワアッ。」

島根県 藤 井 明 朗

千鳥足隣の犬は忘れたか

隣の犬と顔なじみでも、酔いきげんでの夜を、わが家へ近づくと、こわ怪しきものと吠え立てる。犬は敏感。

大阪市 大 坂 形 水

赤ちゃんが突如気持ちの良いおなら

昭和39年、川維新春句会の兼題「赤ちゃん」の天に入選、路郎先生より称賛の評を頂いた句である。初孫を得た時の明るい一コマ。

加賀市 細 呂 木 魯 木

天気予報下駄占いやったるか

天気予報も自然の事故無理だ、明日は息子の結婚式、天気予報はあいまいだし遂々自分で確かめる気、下駄を持ち出し明日天気にナール。

泥棒の逃げた窓から首を出し

大阪府 菊 沢 小 松 園

路郎先生からも褒めて頂いた。殊に故豆秋氏からは、あッやられたと本当に残念そうに言われたのが印象に残っている。

岡山県 浜 田 久 米 雄

寝そべった猫を蹴飛ばす農繁期

猫の手も借りたい農繁期。昔から猫の手も借りたと言われているのに猫奴秋日和を横になるとは。どてっ腹をつき上げてやった。

大阪府 小 川 静 観 堂

石橋を叩いてばかり男のくせに

右の句の通りで私は清潔。私の知っている兵隊、第二次突撃の際、ゴム製品の予備がなくて、最初に使用したヤツを裏返えして使用。

倉敷市 水 粉 千 翁

茶がはいりましたと出鼻くじかれる

悪友来たる。よしきた追加『酒』と言わさぬ妻のタイミング。
茶がはいりましたと笑顔までつくり、畜生!!

同 人 作 品

熊本市 楠 田 英 子
泣く声もがき大将は勇ましい

「わあーん、わあーん」チビ連の大ボス進君、のど坊
主みせて手放して泣いている。大小二本の脇差しをさし
た進君、おかしいな！。

呉市 林 野 甦 光
庄巻はあと一枚を捨てるとこ

変な夢を
見たものです
でも初夢かな！！

竹原市 杉 原 愛 鳩
二十年遂にあなたと云いそびれ

ウチの奥さんはあなたと云うのが恥かしくて、アノー
で通して来たが此頃では「お父ちゃん」と云う便利な名
詞を使用している。

大阪市 石 倉 旅 風
解らない洒落を苦笑で紛らわせ

秀句では無いが没にはならず、類句、暗合句があつて
も、捨て難い。私は我が句を愛し、生命のある限りそれ
を累積して行く一人だ。

高槻市 傍 島 静 馬
一電車ズラして掛けて譲らされ

ゆうゆうと掛けたままではよいが、発車間もなく、兎ど
も連れのおばあさんがよろめいてきた、男子たるもの、
豈座視すべけんや。

ハワイ 若 本 あ き 坊
主婦のスト子守も兼ねてブラカード

食料値段の高騰に抗議の不買ストが決行され、その中
には子供を乳母車に乗せ片手にブラカードを持ってピケ
ットを張っていた。

大阪市 西 出 一 栄
夫婦喧嘩犬も喰わぬは若いうち

はげしい夫婦喧嘩へ捨ててもおけず仲裁に這入ると馬
鹿を見るが、隣寄つてからの夫婦喧嘩はみじめなもの、
黙否権行使で長期戦。

豊中市 戸 田 古 方
寝言までいうグローブだけど買えず

敗戦混沌のさなか、時の流れに押し流されていた私。
正に自嘲の一句。川上三太郎氏著「川柳二〇〇年」に拾
われていた。

大阪市 水谷 竹 莊
ドック入りしてまで病氣さがす気か

老人になると、どこか悪いところはないかとドック入りして病氣をさがすが、もし病氣が発見されるとそれが氣になるものだ。

堺市 田中 狂二
亡姉さんの形見兄さんごと貰い

姉の死あとへ妹が嫁に直るのはよくある事。親達も姉の氣心は知っているし荷物の心配もなし、妹は姉の形見のすべてが貰える。

泉佐野市 大工 陸 夫
共白髪二人暮しに夢があり

三人の娘は既に結婚、作は東芝本社在勤、嫁と東京にあり、妻と二人暮し。初孫の便りも来、夢は尽きる事なし。

兵庫県 河原 みのる
落葉掃く尼僧も拝観料のうち

訳の解らぬ重文などどうでもよく、惜しいもんやと清楚な尼僧の品定めに余念がない。これで料金の元とれたと不埒千萬な俗人共。

大阪府 西 い わ を
ころぶかと思うお辞儀を繰返し

「お客様は常に王様である」と云うのが顧客信条。御来店の折このような態度でお迎へ米搗バッタのような素振りこそ滑稽そのものであるが。

兵庫県 遠山 可住
ほんぼんが博士をもろた頼りなさ

「問屋のほんぼんが医学博士をもろたとよ」「どうせコネのお光りだろうて」「盲腸でも切ってもらうか」「くわばら、くわばら」

大阪市 宮尾 あ い き
奥さんを忘れてふぐと心中し

世の男性方よ、ふぐをお食べになる時は、奥さんや子供さんの顔を思いうかべてからにして下さいましね。

大阪府 児島 与呂 志
妻の背にたよりかかれる今日も無事

妻は私の稼ぎで食べるのを当然だと思っているだろう。だから私は妻にたよりかかっていると毎日が無事だと思っている。

同人作品

大阪府 高 津 徹 也
女にして出来る遅々たる刺繍なり

寸刻を惜んで編物や刺繍にいそむ女性をみる時、私は母に最敬礼をする。私は、あの計り知れぬ忍耐力の誠全くの欠乏症だから。

大阪市 正 本 水 客
じよろじよると胡瓜がのびて雲の峰

その曲りくねった伸び方のたくましさ、ジツと眼をとめてみると、じよろじよるとより言いようのない可笑し味を感じるのだ。

神戸市 仲 どんたく
なじみ客酒あてごうて放つとかれ

「たまには酌もしてくれよ」「私が忙がしいのを喜んでくれんとあかんやないの、そんなこわい顔して、お客さん帰して来る間飲んでね」

加賀市 梅 田 久 雄
ラブレターが出て大掃除お茶になり

兵隊時代のロマンス、終戦一年半、私はシベリヤより復員、トランクの書翰綴の一枚がいはや、女房ニヤニヤ娘三人ガヤガヤ。

大阪市 中 川 滋 雀
ウインドにニョキッと履かせたシームレス

白昼堂々と店先に太股を逆立ちさせ、用のない男性の目にもドキッと来る。よくもまあ何んとか法に触れないものだと戦前派。

熊本県 有 働 芳 仙
馬鹿な子だと言えば遺伝とやり返し

親馬鹿チャンリンと甘い親、騙し易い親の代名詞があるが、時折我子が殊勝な事をしたり、頭腦のいい所を見せたりするものだ。

岡山県 浜 野 奇 童
神様とバスが忙しいお元日

薄暗い境内に渦巻く善男善女「スリもきよう宜しく頼む初詣で」又、新しい良き年があらわだしく明けてゆく……。

大阪市 神 谷 凡 九 郎
漫才の二人も外遊して来てた

懸賞で、のど自慢で、其他外国帰りの多い事。行って帰っただけだが、その人に何をプラスしたか。此の漫才師もまた外国帰り。

大阪市 長谷 沢 義 英
洋行のみやげに残すおちよば髪

今や〇〇視察に海外旅行は大流行。「俺も行ってきたよ」といわんばかりに、おちよば髪をつけて喜んでい
る。愉快な紳士……

青森市 工 藤 甲 吉

ひっ込んだ腹へ近所もほっとする

なにも他人のおなかまで気に病む必要はないのだが、そこは女同士である。ともかく無事にお産みになってめでたしめでたし。

大阪市 橘 高 薫 風

明治百年蹄の音は消え去りぬ

宮さん宮さんお馬の前での唄に切って落された明治維新。以来九十九年、丙午の迷信を最後に馬は蹄の音を消した。

京都市 松 川 杜 的

がむしやらに生かしてくれぬ子が一人

時には思い切り斗志を燃やしてやりぬいてみたい日もある。が家には来春大学受験生が未だ一人、所詮は子のための人生か？

出雲市 尼 緑 之 助
妻老いぬ顎のはずれる大欠伸

ユーモラスな句と言えば、故き豆秋が断然群を抜いている。この句などユーモラスを通り越してげんめつである。

竹原市 山 内 静 水

ガリ勉の甥たのもしい飲みっぷり

大学三年の甥で変屈もいいとこ、めったに口も利かない、筆記で用をたす彼が突然の来訪とあって、酒を酌み交してのオドロキ。

豊中市 寺 田 花 宵

手をなめた犬を迷わず買うと決め

動物は心を正直に行動に移す。人間は彼等の気持を付度して愛憎の情を抱くものらしい。うちの犬は私の句への格好な被写体です。

高槻市 山 田 季 賛

事故起きて始めて次のプラン立て

毎日、新聞記事を、にぎわすのは、事故である。交通事故、山の事故、起きては、対策立て直しが現状である。

堺市 八木 摩天 郎

今日よりはあなたと呼べる恥しさ

末娘の嫁いだ披露宴の席上の一分間吟、拡声機で、新婦のお父サンの川柳と云うハンドキャップもあってこの句が流れた。

難儀なことに音痴うたが好き

大阪市 不二田 一三 夫

近所のすし屋の若い板前クンは、酔でも茹薺でも食えないウルトラ音痴で、歌いだすとノリ卷きがアン卷きの味になるのでこまる。

「笑い」について

北川 春 巢

「ユーモア特集」の「ユーモア」とは何ぞや。こんなことからセンサクしたい私の気性である。「ユーモア」は英語から来た外来語で、樗垣実編の外来語辞典でみると、「上品なしゃれ」「上品なこっけい」と出ている。

「川柳雑誌」第三九六号（昭和三十五年）に、私は「川柳における「笑い」について」という小文を発表し「笑い」と「おかしみ」についての関係をいささか考察した。その時はパニョールの著書を参考に使ったのであった。今回も同じようなことになりそうだが、題は単に「笑いについて」とした。

「笑い」は肉体的なもので、「おかしみ」は心理的なものである。この両者は心理的にどこでつながっているのだろうか。心理学

辞典（平凡社）で調べると「笑い」は次の三種類に大別されるとのことである。すなわち(1)うれしさの笑い、(2)おかしさの笑い、(3)演技としての笑いである。われわれの問題にするのは(2)の「おかしさの笑い」である。「おかしさの笑い」はまたこれを分けて(イ)機知の笑い、(ロ)諧謔の笑い、(ハ)滑稽の笑いにされるという。

(イ)の機知とは頓智ともいい、ウィットという方が分りがよいかも知れない。一休和尚の話によく出て来るのが機知、頓智で、これは小学生でも笑うのである。が川柳にはもう一休和尚式の笑いは見られない。

(ロ)の諧謔というのは字引で調べると「面白じょうだん、しゃれ」と出ている。地口、秀

句などをいうものと思うが、新川柳には語呂合せで笑わせようというようなものもない。

縁語、かけことばなどともこの部に属するが、古川柳にはこの種のものは多いけれども、これも現代川柳には発見できない。初心者の中には、川柳は笑わせるものだと思つて、わざとこの種の句を作る人があつても、選者がこれをオミットしてしまう。川柳が狂句としてしばらく世の識者から忘れられたのも、これがためではなかったらうか。

(ハ)の「滑稽の笑い」が、川柳における「笑い」の本命であると思つたのである。滑稽とは「期待と事実との相違によるおかしさ」であると説明されている。川柳の三要素の一つに「穿ち」ということがいわれるが、「穿

ち」とは表面に出ない所を巧みにあはき諷刺することである。とすれば、「穿ち」の中に滑稽も含まれるとみてよからう。樗垣氏は「ユーモア」とは上品な滑稽であると書いておられるといったが、滑稽も上品でなくてはならない。

故路郎先生は、その著「川柳とは何か」の中の「可笑味の句」の所で、近来可笑味の句が減つて来ていることを説かれ、
世相を反映する川柳に可笑味が減つたといふことは、世相が笑えない、可笑味のないうものになつてゐるからであらう。笑えない世相に可笑味の句を作れというのは無理だといふ人達があるかも知れぬが、同じ事象に対してでも明るい見方をすれば可笑味の句を作ることでもできるであらう。

とっておられる。

路郎先生の句に（「旅人」より）
大臣になれぬことだけわかつたり
というのがある。「期待と事実との相違によるおかしさ」の見本といえよう。上品な滑稽であつて、これこそ樗垣氏の定義による「ユーモア」であると思う。
またユーモア作家といわれた故須崎豆秋氏の作品を少し見てみよう。（「ふるさと」より）
口髭を生やして猫の子が生れ
骨立てたまま二次会へついで行き
交番の留守へこんにはこんには
句集「ふるさと」を繙けばユーモアの句はいくらでもあるがこれくらいにしておこう。

さて「笑い」についても一度理論に帰ろう。いったい落語や漫才の人を笑わせる「お

かしさ」はどの部に属するものであらうか。もちろん「機知の笑い」「諧謔の笑い」もあるであらう。しかし有名な古典落語に「コンニャク問答」というのがあるが、この「コンニャク問答」も笑いを提供する。

はからずも寺の和尚に化けたコンニャク屋の六兵衛と永平寺学堂の沙弥托善との無言の問答が「コンニャク問答」といわれるものである。托善は親指と人差指で小さな円を作つて「日の本は」と問ひかけた。六兵衛はこれを「お前の所のコンニャクはこんなに小さい」といわれたのだと思つて、両手で大きな円を作つて「こんなに大きいのだぞ」という意味に答えた。托善はこれを見て「大海の如し」という意味に取つた。次に托善は両手の指を十本広げて出して「十方世界は」と問ひかけた。六兵衛はこれを「十丁でいくらだ」と問われたと思ひ、五本の指を出した。「五百だ」という意味であつた。托善はこれを「五戒で保つ」という意味に解した。次に托善は指を三本出して「三尊の弥陀は」と問ひかけた。六兵衛は「三百に負けろ」といつてゐるのだと思つて「赤んべい」をした。これを托善は「目の下にあり」と答えたと思ひ、問答は負けたとはおほおほの態度で逃げ出したといふ話である。落語家がやれば、そのジェスチャーも面白いので聴き手は笑うのであるが、このトンチンカンな所も面白い。このように同じことは（記号）で違つた意味を現わすのを「コンニャク問答」という。これは滑稽である。「道具屋」の落語もやはりコンニャクである。馬鹿のヨタローが買わずに行くことを「小便をする」というのだと教えられ

て、股引を買いに来た客に「小便はできませんよ」といったら「小便できないような股引はいらない」といつて、お客が帰つて行つたと笑わせるのだ。「饅頭がこわい」という落語の「こわい」もコンニャクである。

先に挙げた豆秋氏の第一句「口髭を」の「口髭」も、猫のヒゲと人間のヒゲと違つものを、同じ「口髭」ということばでいつてゐるのはコンニャクの応用で笑わせるものである。

「コンニャク問答」とは反対に、一つのことを色々の記号（ことば）で現わすのを「テレスコ問答」という由である。イカの干したのをスルメという如き場合である。これの起りに関しても面白い落語があるのだが、紙数の関係で省略することにする。これもトンチンカンになつて笑いを生む原因になる場合がある。しかしこの適当な例句は発見できなかった。

前記心理学辞典には、私が「川柳雑誌」に「笑い」を書く時に参考にしたバニョルの「笑い」に関する説は「突然の驚きからの解放が笑いを生む」と要約してある。「笑い」に関しては、心理学的にもバニョル以外に多くの人が色々の説を立ててゐるが書かれてゐる。川柳におけるユーモアも考へてみればむずかしいし、心理学の「笑い」もまたむずかしい問題だと思つた。

コンニャク問答めいて双方笑い合い

春 果

参考書 片桐ユズル「意味論入門」思潮社

第十八回

大阪文化祭

川柳大会

戸田 古方

大阪中央公会堂の三階小集會室が多くも、少くもない満堂を埋める一六〇余人が今日の出席者であった。

格天井を思わせる真中にカットグラスのシャンデリア、水銀灯がついてだんだんあかるくなる。一時二十五分、司会の西田柳宏子氏が席題出句を督促。窓の外は晩秋の陽がいっぱい。市役所の尖塔と図書館のドームが重なって光っている。

開会のことばは川柳文学社の上保金恵氏。柳界長老川上三太郎氏の紫綬褒章授与の榮譽を祝され、路郎、水府両先生、亡き柳友各位の見守って下さっている中で第十八回大阪文化祭川柳大会を開く喜びを述べらる。次いで主催者、大阪府市側の挨拶。早速、お待ち兼ねの秋田実氏登壇、演題は「大阪の俗諺」。

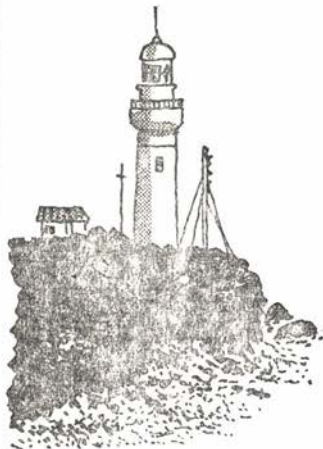
「偽」という字は人の為めになるなら嘘も許されるという字。「目に入っても痛くない。」私はエントウ、アチャコ両君にこれを漫

才でやってもらって成功した。これは目でなければならぬので、鼻であってはならない。商いは笑。音でいうとショウはショウとなる。大阪では馬鹿野郎とはいわない。阿呆という。阿呆をド阿呆といっても、どっかに笑いがあ。ドケチ、ドタマも円い言葉である。不愉快の度合を出来るだけ消そうと努める。

「時計なおし」といってには二つの意味がある。仕舞い込め」と「修繕せよ」で、「なおす」を「仕舞う」の意味に使うのは大阪弁で舞う。思いもかけぬスカタンが起つたりする。悪口もおもしろい。「喰いしんぼう」というところを「淀川のごもく」という。謎かけみたいに、その心は「喰い（杭）にかかって、離れない」。

「スベースがないので書けないが現代漫才生みの親である秋田実氏のお話は川柳作句に色々のプレゼントを残しておわる。席題は菊沢小松園、鶴飼麟園、兼題は生島鳥語、岡橋宣介、片山雲雀、中島生々庵、堀口堯人、諸氏（秀句は前号発表）いずれも菊花の香りのような名句である。各題終る毎に秀句へ知事、市長府教育委員会長連署の賞状、賞品の授与があり、四時すぎ、若本多久志川柳塔社副理事長の開会のことばがすむとめでたくお開きとなった。

南紀の旅は なんば から



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに (毎日) 12時45分発
急行 南紀3号 (毎日) 16時38分発
急行 臨時しらはま (土曜) 13時10分発

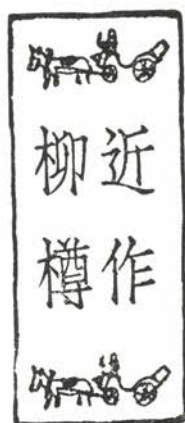
＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号 (毎日) 7時45分発
夜行直通列車 (毎日) 22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を他の列車は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(641)8686 (341)5038

南海電車



若本多久志選

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

無一文というスリルも涼しかり
米作り五十年受賞まだかいな

舌鋒のするどさ女房これにあり
鶏頭だ菊だ今年もあつけなく

布施市 坂 東 若 芽

四十路の名残りが惜しい派手を着る
遙かなる想い出を呼ぶまなこ閉じ

開店の粗品がほしい列並ぶ
黒い毛は抜かれ白髪は逃げ回わり

大阪市 小 東 琴 女

癒え近く陽ざしへ試歩の手をひかれ
だしぬけに来て内職を慌てさせ

嵐峡の墨絵にほかす時雨傘
打診してみたが反応のない握手

高知県 山 川 勝 子

くしやみする夫へハイと玉子酒

事務服の下から覗くネツクレス
十二月子供の貯金も借りる破目

羽咋市 三 宅 ろ 亭

今頃の若い者はと言ひ切れず

子に負けてそのセオリイを是認する
大学へ四人ヨレヨレのズボンなり

奈良市 村 上 春 己

孫が今すべり初めるすべり台

フオークダンスの若さを鹿も見ろ
満腹の鹿は頭を下げて来ず

羽曳野市 谷 垣 史 好

空に穴あけてスモツグ逃したい
護摩たいてもろて喘息むせており

飛行雲はかない恋の軌跡に似
仙台市 川 村 映 輝

一円貨財布のすみからつまみ上げ
ベースアツプ決つた今日は酒くさい

夢に見る夫息子と同じ齡

摂津市 河 本 雪 男

ほんとうの決意はジツと胸に秘め

虚飾の女鏡に嘘を見やぶられ

感傷を友に晩秋の一人旅

米子市 八 木 千 代

子が飲める頃合いまでの白湯を吹き

赤電話犬が見ていて声落し

郷愁の眼に夕映の木守り柿

広島市 上 代 美 文

わしの財布からシヤアシヤアと妻払い

頼なこと聞いた受話器はガチャリ置く

有線は旅の子供の無事を告げ

松山市 西 川 み や こ

母の一周忌に帰郷

一周忌車窓は同じ秋の色

こがねの穂縫うて祭りの太鼓ゆく

設計図囲み夫婦の夢つづく

愛知県 横 紫 光

造花でもたまには水も吸いたかる

ときは秋課長の宅もサンマ焼く

子が横に居るのに巡査よく叱り

桜井市 岩 本 雀 踊 子

生きてゆく慾が小さな嘘となり

胃袋も満足をした妻ようじ

酔うてえへん酔うてえへんが酔っている

竜野市 森 下 峰 子

よそ目には素敵なハズをもつ悩み

迷うてる土産に試食すすめられ

切り抜きの素敵なポーズという下宿

姫路市 前 田 芙 己 代

ゴシツプが消えた頃にはもう他人

美しき年輪睦み合う老夫婦

我田引水その水にのまれる日

米子市 林 瑞 枝

よいことはみんな私がしたことに

落葉焚く煙 けむたがる方へ向き

恋文へ姉 姉なりの知恵を貸し

鳥取市 藤 本 征 也

倅せな祖母還歴の丙午

考古学十萬年の過去へとび

小鳥飼うつもり小鳥に使われる

千葉県 鳥 飼 春 泥

迎え酒飲めば癒ると第三者

傷薬りばかり減つてる子沢山

雨の音ワルツに聞いた頃もあり

七尾市 松 高 秀 峰

丁寧丁寧に眼科医手を洗い

味噌汁にある栄養と母の味

正直に言えば怒らぬ父悲し

羽曳野市 菊地茶坊

不用意な言葉が重く肩にくる
あの頃の甘さ斗病も七年目
蚊に負けずうなり続ける詰将棋

出雲市 竹内李朋

蟾螂が寄らば切るぞという構え
ある日ふとジギルハイドに似て淋し
急ぎ足朝を流れるおはなはん

尼崎市 中谷利美

人工の顔へ男は求愛す
空箱をためて女よ何する気
本名で結婚芸名で離婚する

八幡浜市 別宮すき

石一つ置いて八方から眺め
しつぽだけ振つて老犬とんでこず
初診した医者にもどつて快復し

倉敷市 水谷水

久方の実家で妻は野党めき
白髪まで染めて二度目の勤め口

堺市 斎藤亜也

元来が養子タイプに出来ており
この辺にありませんかと赤電話

島根県 小砂白汀

やけくそのように刈つてる雨の稲
又ばけた眼鏡へ腹もたたぬ歸

大阪市 西本保夫

混浴の風呂ヘタイルが白すぎる
テレビも無い頃で私は勉強家

大阪市 和田痴享

詩心なき老婆念仏三昧し
大和路できく晩鐘は胸にしみ

八幡浜市 平田三立

お神輿もトラツクに乗る世とはなり
鮎を追ひビク置き忘れ日暮れたり

高知市 永野舞子

梯子酒帰れば妻が起きていた
会費では足が出そうな三味の音

米子市 石垣花子

生沽をかけた漁火燃えつづけ
還歴のやせずねをまだかじりに来

太田市 藤田軒太楼

和尚から紅葉の便り暮敵へ
食欲の秋とばかりに娘肥え

高知市 田内文子

美容院替えりや他人の顔にされ
アパートの一間掃除機邪魔になり

大阪市 武居寿美司

秋雨の音独り居の香をたき
あくびすりや向へうつる終電車

大阪市 西川誓二

この秋も嗅ぐだけだった山の幸
国破れダイヤは残り人並ぶ

松山市 河本南牛史

あわてたら口に残った柿の渋
芋を掘る男汚職に縁遠く

堺市 羽田一扇

俺に似て二等寝台小造りな

フルコースすめば茶漬が欲しくなり

河内長野市 森本黒天子

外孫が来て部屋中が春になり

小さくとも泉水が出来山もあり

大阪市 古川集一

文化住宅でもやつぱり風邪をひき

救急車見送っている立ち話

鳥取市 近藤秋星

感激の言葉マイクへ途切れ勝ち

選挙とは哀れ他人にみな頼り

竹原市 時広一路

新聞を隅まで読んで日曜日

ほろ苦い酒飲む夜もあり平社員

竹原市 三宅不柯

情熱の極りし音熟柿落ち

町じゆうが嘘一杯になる選挙戦

カリホルニア 斎藤流路

郷里の土の匂いよ乳に似て

夜の庭で脈を計れば怖しく

島根県 石田清泉

若く見て貰つて平役喜こべず

黒柿の笑つた顔へ焼香し

竹原市 小島蘭幸

話しかけてみればこの人よく喋り

おごられる弱味同じものにする

広島県 高橋鬼焼

駅弁のつり慌てさす発車ベル

日本の四季へお酒を結びつけ

島根県 大森孝華

気前よく書いた寄附金出し渋り

不義理して逃げた故郷へダイヤはめ

西宮市 船津千夏

お手料理はめて銚子のご催促

嫁きおくれ夢ばかりを追いつづけ

鳥取市 藤本佳女

スモッグを吸つても産業都市に生き

割勘へ飲まぬ分だけ食べてくる

鳥取市 細谷勇仁

収獲も終りわが家の灯がなごむ

逝きし子のプラモ飾つたまま三つ月

鳥取市 藤本鎮也

逃げて来たのが東京ほめちぎり

独りでは惜しい砂丘の月が冴え

大阪市 石田水郷
旦那さんに財布持たさぬ家風なり
海苔巻の太さ女房は太つ腹

大洲市 堀内曉風
インテリの知恵決断に踏み切れず
気品とは模造の指輪よく似合い

鳥取市 山口昭好
化粧品箱を変えれば羽根がはえ
干ぶとん猫も一緒に丸く寝る

鳥根県 堀江芳子
どの柄に決めよう見えぬ夫に聞く
眼の見えぬ夫に世間教えられ

鳥根県 堀江正朗
誰に見てもらう気妻の外出着
百数えることを覚えて腹立てず

大阪市 小谷葉子
病床の花替え嫁ぐを言いそびれ
ノンストップ故郷へつづく紅葉映え

新潟県 高野不二
アリババも驚くような自動ドア
捨てられぬものばかりなり大掃除

下関市 志賀木石
男はんはいいなざぶざぶ洗う髪
この親にこの子がありと口答え

八幡浜市 山本初音

クラス会ダイヤの光る向きにかけ
心まで冷える月賦の冷蔵庫

寝屋川市 福富隆子
黒い霧小説の題かと思ひ
停退をねずみ如きにかからかわれ

八尾市 高杉鬼遊
地鎮祭儲けるつもりがかしこまり
コンベアーテキパキ仕事せよと言ひ

愛媛県 竜本満子
情熱で生きてはいけぬ金が要り
後妻でもいいのお金があうなる人

父死す 広島県 南条露声
父死すのウナ何べんも読み直し
骨抱いて十一号線静かなり

羽曳野市 麻野幽玄
父の日の父亡く父でない四十路
過去を伏せ奇遇の友と酒を酌む

宇部市 柿部いさ夢
居眠りが拍手に覚めて会終り
人情と義理は忘れず金が無し

八幡浜市 菊地美香
若者が農を継がない稲実る
蓑虫も蓑着て雨にぶら下り

出雲市 王紫
人口孵化戸迷うような声で鳴き

天休の仲間外れか星が飛び

岡山県 目賀芳月

日曜日扶養家族に指図され泣きごとも言うてお巡り親しまれ

尼崎市 貴志千尋

傍線は妻にも読んでほしいとこせめてもの愛情自分で靴磨く

ハワイ 上田紅溪

踏まれても春を忘れず名無し草筆不精郵便値上げを理由にし

岡山県 瀬戸山文平

天職に恥じず素直に履歴書く食欲の秋へ胃袋痛み出し

羽曳野市 杉本白扇

トンボまで俺を斜めにスイと行き雄草を踏んでも真近い冬を知り

大阪市 江城功雄

愚痴誘う身は1寸の無為徒食人間不信の日吾が心まさぐる

茨木市 高木繁太郎

元大将国会議場に生還し

松江市 町中村魚

置き手紙用意して来た家に灯が

松江市 小長谷由日可

秋深し大臣何を考える

笠岡市 谷本鈍愚坊

テレビにも笑える程に病い癒え

善通寺市 伊藤歌子

一人旅ならぬ亡夫の遺骨抱き

尼崎市 平井露芳

チャイナーと呼ばれ支那とは言わぬ国

京都府 菊沢破天

亡き後をさとしておやじ長生し

高槻市 山田スミ子

退院をして今さらの我家なり

北九州市 藤田独楽

二世の誓い苦勞覚悟と言うけれど

愛媛県 豊島二九三

オフィスのサラブレッドがまだ嫁げず

本年のご活躍を祈ります

西尾 栞 北川春果

菊沢小松園 松江梅里

川村好郎 若本多久志

秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

人生も五十を過ぎて変化球

(甲吉)

この句を見ると、この頃の人生が愉しくなるのである。人生が若返ってきた感じ。五十も過ぎると、変化球の要領を身につけるものであろう。

野球の変化球とは、打者の手許へきてシズんだり、浮き上ったりする、云わば打者を困らすタマであるが、ここに云う変化球とは、投手、自らが変化して行くことでは、あるまいか。あだかも変化球の如く、妙技を見せる人生とは面白い。たとえそれが余義なくされたことであっても。

野球の変化球なら、この頃は若手の方が良く投げる。ドジャースの強打者連を困らせたことと思ひ合せて、微笑を禁じえない句だ。

焼跡の暗さは虫の鳴く広さ

(水客)

作者はさき頃、焼跡の厄に会われた。

この句も「類焼に遇いて」のうちの一句だが、状況が一とお迫る感がある。

火事があると大抵雨が降る。そうすると、そここの焼跡から虫の音がする。不思議にも地の底へもぐって居たのかと、感心する。作者もそれを味わったのであろう。人家の焼け落ちた跡ほど、悲惨なものはない。見るもの、聞くものが、哀しみの塊りである。作者に九月十七日は忘れ得ぬ日となろう。

逃げられるもんかと蜘蛛が搦めに来

(半休)

作者は「転業」したのか、三態という前書きがあるが、この句は、前書きがなくても分かるような気がする。

蜘蛛という動物は、相当大きな黄金虫でもすぐ血を吸ってしまふ。元来いやな動物だが、かここいらしくて、クモの巣を指の先でつつくと、出かけて来て止めてしまふ。めったに人間の指に食いつくことはしない。

その蜘蛛が、いよいよ獲物にあり付いて、逃げられるもんかと序々に這い寄ってくる態度は実ににくらしい。

この句は、よく観察して居ると思った。

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス

積水化学
本社 大阪市北区宗道町1

み



道と名がつけばへの字もままならず

(旅風)

この句も書道と前書がついていて、恐らく作者は書を習い出したものであろう。

書道とは、字がうまくなるためばかりのものではない。一つの処生上の心掛けであるが書道の先生はむづかしいことを云う。

「へ」という文字の効用は、広くかつ如何なる場所にも接統詞の働かしをやるが、無造作に書けばまことに書き良い文字だが、正しく書道に則って書けば、この位かたちの取り

にくい字はない。

世の中のこと、への字の如く、た易いものほど容易でないことを、この句は思わせる。句の裏に、作者の感じているものが貼り付けられているような気がするのである。

もう鳴らぬ風の風鈴に秋の風

(花宵)

風鈴を外し忘れていたのである。

もう鳴らぬ気になっている風鈴へ、涼しさを感じる真夏の風ではなくて、そぞろ寒い、秋の風が吹いて風鈴を鳴らした。

風鈴を、擬人的に扱っているのだが、それを感じさせぬうまいがある。

風鈴の音のよい物は南部産で、この頃土産にもらう松笠風鈴などに、名残りをとどめているが、昔はなんとも云えぬ音いろだった。風鈴の音色で住む人が分ったものだ。

須坂市 高峰 柳児

ライバルの落目へつけこむ不甲斐なさ
灸すえて余生をしがみつくみじめ
アルサロの話題だんだん地味になり

貫い泣きされてるだけで頼りない
迫る冬のどかさもなく落葉焚く

松山市 月原 宵明

歩行者の権利右手を高く揚げ

世話好きのおやじうちでは手がかり

(静馬)

人が好いから世話好きになる。世の中のこととは、世話を焼いてくれる人があって、なごやかになるもの。有難い存在なのだが、家族の人達は、この世話好きの主人には困らされるものである。欲得を離れた他人の世話。

こんな人は、気まぐれなところがあり、その上せつちで忘れものもする。なかには怒りっぽい人もある。世の中は、まことに面白く出ていくものだ。

この句は、客観句のごとくして、じつは作者その人ではあるまいか。

病院の炊事場だけが活気つき

(法泉子)

病院は、総て静粛ということになっているが、炊事場だけはとくべつである。

命の火守るが如く日向ぼこ
介抱をさされ割勘用捨なく
組板は妻の個性のまま回み

今治市 長野 文庫

冬眠が出来るものならしたいもの
ダンブカーちびりちびりと山を食い
漂流の型で稼いでいるクラゲ
黒い屋根白く光らすお月さま

皿、小鉢のふれ合う音。配膳車に積む音。ボイラーの蒸気の音まで聞える。戦争のようである。それに引きかえ病室では、まだ廻診を待っている人もあり、ウンウンなっている患者もある。全く世はささままなのである。はち切れそうなの炊事場たちの働らき振りには、病院の特異な風景の一つであるように思う。

この句は、卒直にいい描写をしている。

観光の波へ五橋が目を見はり

(英子)

今まで忘れられていた天草島に、近代的な五つの橋が出来たことは、最近のヒットと云っていいだろう。まず修学旅行の生徒は船に乗って橋を海面から眺め、それがすんで、三角港から観光バスを連ね、五橋を往復観光して、それから阿蘇へ向うのである。かつうな観光ルートが出来た訳で、毎日押すな押すなの人出と聞いている。土地の人々が目を見張るのも無理はない。

この句は、五橋が目を見はりと適当な省略をして、風景を生かしたのが手柄と思う。

眼鏡のすべった位置で子を叱り

(新雪)

この句には子供の動作を伴っている。何か悪戯をしたらしい。それとも座敷の中を駆け廻りでもしたのか、ご隠居さんが大きな声で子供の行動を制止したものらしい。

子供は、びっくりして止めたであろうが、

ご隠居さんの余憤は、なかなか納まらなかつたであらう。

「眼鏡のすべった位置」というのが、よくその時の有様を説明して、余りあるように思う。句というものは、こうした瞬間の動作をうまく捉えることが肝要である。

倦怠期其の都度変わるお茶の味

(一 榮)

説明するまでもなからう。夫婦の倦怠期におこる現象を実によく掴んでいる。

倦怠期の現象はいろいろあって、冷戦にもち込むもの、いや味を云うもの、時ならぬ火花を散らすものと、数限りなくあるが、何れにしても愛情の全く冷え切ったものはない。これも生活のひとコマだ。この句は、静にそれを堪えている姿であらうか。其の都度、が味わいを濃くしている。

2DK家風を捨てたい暮し

(たつみ)

二た部屋と食堂、キッチンという暮しは、アパート住居のそれでもいい方である。今大阪で新しく建つ鉄筋アパートでは老万円で上だろう。

子供が四五人あって、客間も要れば、仏間も、女中部屋も要った昔の生活は、戦災と同じにサッパリお別れを告げて、新しい生活にはいった人が多い。

住めば都とはよく云ったものだが、これも

民族の運命と云えぬこともない。否むしろ、こんな人達に新しく運命がひらけるであらう。満足しきつたすがたが見える。

泣けそうな夜は日記を味方にし

(芳子)

まことに雅拙なところがあるが、句には、人を打つものがある。この人の夫君は盲目と思われる。近作柳樽の巻頭を占め、六句づいていて、どれをとってみても必死の力が籠っている。とくに日記の句にうたれた。この句にふれて不幸につけ、しあわせなるにつけ、川柳は真実なりと思つた。

パートタイム一息入れるモカの味

(葉子)

一日五時間ぐらい職場へ勤める、主婦達の新しい職場がふえたが、主婦達はこの職場を通じて、世間の動きも知り、新しいエネルギーをもち帰るのである。

モカの味が実によくマッチしてこの句を引き立てている。一息入れるも、これと相俟って面白いムードを出していると思つた。

共稼ぎうつかり疲れたとも言えず

(集一)

面白い句である。この句によると共稼ぎには、共稼ぎの世界があるらしい。お互いにかばい合い、同情し合うのではなくて、互いに

バランスが崩れないよう精神面の調子をとっているように思われる。

生活も新しい様式がすすむにつれ、優劣感もススミ、外界の変化とスピード化に新しい男女関係を生みつつあるのであらう。この句を見ると、それが実によく分かる。

第十七回

大萬川柳大会予告

日時 昭和42年2月12日 正午開催

会場 大阪市阿倍野区松崎町 大萬

会費 百五十円(大会句集代を含む)

兼題 長生き・苦勞人・ターミナル

女連れ・奇蹟・各題五句以内

大会当日の出席者も一月末日着便で投句して下さい。投句のみの方は百円

(句集代を含む) 封入

ベストテンの発表と各選者の決定及び大会当日の式次第などは川柳塔二月号誌上で詳報します。

主催 大萬川柳会
後援 川柳塔社

初歩教室

一題「寒風」

本月の題は寒風であるが、季節的な詠みやすい単純な課題である。俳句と違って歳時記的な季節の制肘を受けない我々の、川柳では題吟は、あくまで自由吟の練習であるから、課題はなるべく広義に受け取って然るべきものと私は思っている。投句された句のほとんどがかんぼうとなっていたのには、いささか驚かされた、寒い風、さむかせ、でも結構句になるし、時にはこの方が、反って和やかで、びったりするような場合もあるのに、事さらかんぼうとする意味が判らない、むしろ一歩進めて、課題そのままを読み込まずに、句の内容に依って課題を詠みこなせたら上々である、こうした中にこそ、佳句も多く生まれるものである。なお、驚いたことに、初めから、五句なら、五句の頭へ、題をそのまま横に書きならべて、それから一鴻千里に句を書きつける。こうしたと思われる投句を見かける。これでは全く冠句であって、川柳ではない。感動や、感興のないところに、句



菊沢小松園

は生まれるわけではない。請取り仕事を納品するよう、締切日にやっと間に合わせるだけの投句は、一考も、二考も要すると私は思う。

寒風の駅で握った手のぬくみ すぎ

寒風に鼻赤くして御用聞き 同

寒風をついて出て来る集金日 重也

寒風にやけに明るい飲み屋の灯 同

寒風へもう一杯と勧められ 湖平

第一句、おそらく恋人同士の故郷の駅での別離の時の思い出の句か、下五で句になった

第二句、寒風に赤い鼻の句は他にも多く見

かけたがこの句も下五でやっと救われた。

第三句、出て行くことあったが、来るとする

方ははっきり下五に對してするようにおも

第四句、私の先に作っておいた軸吟によく

似た場所を詠んではいるが、やはり違うよう

だ。やけにがよく利いて、句意がはっきりし

た。酒好きの誘惑される過程を、見るように

面白い。第五句、寒風へありがとうとあった

がこうした方が句意が明瞭になる。寒風へ礼を言う人もないだろうから。第六句、これも飲み屋風景か、寒い時の酒、取り合いがよいので何かもとなければ平凡に過ぎる。

北風をまとも孤独の肩へ受け

寒風に追われるように母は漬け

生きて行くため寒風へ靴を履き

寒風の街角社会鍋の音

柿一つ寒風の中ぶら下り

日だまりへ人吹きよせている寒風

第一句、孤独の肩が利いた、題意に合った

語句を選ぶことの重要がこの句が教える。第

二句、雪国の冬ごもりまでにたくさんに漬め

のをこしらえて備える情景、中五で気ぜわし

なさがよく出ている。第五句、他にも同想は

あったが、この素直さを取る。第四句、師走

風景でべつだん珍らしいものではないが下五

の扱い方で句になった。第五句、これもやや

平凡ながら、素直さを頂く、これもただ一つ

残って、寒さを突いてまでも誰も手を出さぬ

と思えばやや救われる。第六句、寒い日の日

照りを求めて、老人たちの消暇の景か、作句

の材功に救われて一句が出来た。

寒風が吹けばラッセル男も立ち

うちの子風の子寒風にめげず

寒さに追かけられてのれんをくぐる同

寒風の夕餉に遅い児を案じ 静観堂

寒風の酒のうまさ腹に泌み 百酒

寒風に働く親の身を案じ 同

寒風に亡き戦友しのぶなべ料理 千夏

寒風へ黒髪なひかせベタル踏む 松風

第一句、あまりにも常套手段に過ぎて損、もし童話川柳と言ふものがあれば入賞確実か

第二句、句のテンポのよさで成功した、句語の運び方のよい参考になる。第三句、これはいわゆる、縄のれんの飲み屋情景、中七の扱い方に注意すること、なんでもない中に引きつける捨て難いものを持っている。第四句、子たぐさんな家庭の多食時、一人児ではこの句は生まれぬ。第五句、これも平凡、一応句の形は備わっているが、寒さと酒だけではあまりにも古い。第六句、貧なればこそ、親をおもう、金持ちの子はあまり孝行の機会には恵まれない。なおこの句親をおもうより、案じの方がこの場合一歩突っ込むようになると思つてこつた。第七句、寒夜に亡き戦友を追憶するよい画題である。しかも鍋料理で、平和は有難い。第八句、これも田園の風景か都会ではこうはいかぬ、ちよつと掴みどころが変わつてゐるので頂いたがただそれだけの句で、やはり平凡はまぬがれぬ。

寒風に仮設住宅ゆきぶられ
袋露路寒風こてゆきづまり

清泉 同 要次

帰すのでなかつた母へ向い風
寒風の掃除まん中だけになり
寒風も苦にせぬ若さ腕を組み
寒風の足は屋台の方へ向き

花子 同 露声

第一句、災害地の後へ建つ応急の仮設住宅もとうり臨時のものだけに、風にもゆきぶられたであろうが、ここにも政治の貧困さが目立つ。第二句、上五にこつ固い漢字がならん

では何だか読みづらいが、句の見つけどころはなはだ面白い。佳句の部に入る句か。第三句、句の素直さを取る。孝行な子供を持った母は決してかせも引くまい。第四句、見過ごす日々の生活の中に気をてくれている。第五句、これもあることを教えてくれている。第六句、これはやや平凡に過ぎた、説明が親切になると句が冴えない例。第六句、おでん屋かそば屋か、とにかく、寒い夜の街頭風景、ただそれだけで句意の浅さが難か。第七句、寒風に吹かれながら本心を聞く、これは男女の中でなければならぬ、佳句というべきであらう。

寒い風老いてセールス身にこたえ
寒風の街でニコヨン汗を拭き

瑞枝 同 英己代

寒風に熱柿震えて唯一つ
寒風にめけず春待つ福寿草

同 同 寿美司

寒風も心ひとつて苦にならず
寒風へいどむ壮士の足の巾

同 同 破天

懐る都合で寒風苦にならず
寒風に頬をうたれて誓う再起

同 同 陽子

第一句、句材のよさに心を引かれた、中七の扱い方殊によろし、引ききまつた佳句と言ふべきであらう。第二句、同じ句主にしてはづつと見劣りする、殊に切りの汗を拭きはや誇張の嫌いが無いだろうか、寒風に対して汗を拭きは、それが実際にあったことでも第三者には、抵抗を感じる、汗ばむ程度でよいのではいか。第三句、これも前にあつた句と同巧異曲、ただ震えての擬人法に救われただ。第四句、句材の見つけどころのわりに平

直原玉 青著

創元社出版
価 二千円

「新しい南画と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

凡に終わった句。第五句、この句の主観の健全さを喜ぶ、寒風何するものぞ人生かくりたし。第六句、この句纏りに対して、親いの古さを借しむ、いまだき壮士なるものを、理解出来る人が、若い層にあるだろうか。ここはまだ剣士とすれば判る句になる。第七句、冷めた風も懐ろさえぬくもつておれば、苦にはならぬ、苦勞人の琴線に触れるものがある。第八句、あまりに真正面から取り組んで、生硬な句になった。読みづらい句は佳句とは言えない。

寒風を馳けぬけて来た赤い鼻
寒風に負ける酔っくり用を出し

正朗 同 芳子

寒風へ負けてはならぬ朝を足る
寒修行風に吹かれるままに乍ち

同 同 水郷

寒風の石焼芋へ人だかり
寒風へ声かくきれた赤電話

同 同 保夫

寒風へ負けてはならぬ生きる道
寒風が道をそそした人利き

同 同 幸

寒風も気にせず二人待ち合せ
寒風を避けて温床花ざかり

比呂路 紫 馳

第一句寒風と赤い鼻は前にもあつて損

けぬけての動作でやっと救われたが平凡。第二句、むしろこの句の方を取る、よく見ることながら句にするにはやや下るけれど面白い。第三句、生活のきびしさを纏めて真面目な句、ケレンのない句に句辞も歯が立たぬ。第四句、これは変わった句材、中七がよい、一船の画を見る心地、佳句として頂く。第五句、市井の情景、庶民の生活にうそはない、助詞の扱い方に気をつけて下さい。第六句、寒風に赤電話、取り合わせの面白さで嬉しくなった、中七のくぎれたもよい、途切れてはだめ、佳句とする。第七句この句も私の好きな句境、生活句として頂く。第八句、決して寒さだけではない、もともと好きな酒ではあるが、こうすれば上五が生きる、左利きのその時の姿まで想像されて面白い。第九句、若い二人にとって寒さなんか、燃ゆる血汐に比べればというところか。第十句、フレイムの中は花ざかり、ただそれだけの句、熱心さが一句に纏めただけの句に終わった。いつもの月より今は句が弱いどうしたことか。

選者吟

寒風そよに飲み屋の灯がともり
露路うらへ曲りくねった寒い風
四十二年二月二十日締切四月号発表
宛先 題「小鳥」五句以内
大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22
菊沢小松園

★編集室から

四ページ予定して待っていたら六ページ分の原稿でアワを食い、あわてて組み直したのが亜鈍氏の「痴首録」と浪花氏の「真鍋一瓢君逝く」が次号にまわったことをおわびいたします。

十二月号を30日と1日に発送したが、毎月、月末におとどけていたので間合わせがたくさんあって迷惑をかけ、申しわけありません。

南海川柳会

1月19日の題は「ダイヤ」運行図「下請け」「暗着」ナンバ高架下親和クラブ

セドリック 乗車用専門販売店
ブルバード

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 木 真 彦

本社
尼崎市尾浜下ノ川434
TEL. 大阪(481) 5681(代)
神戸営業所
神戸市長田区二番町4丁目2-1
TEL. 神戸 56725
明石営業所
明石船上町82
TEL. 明石 5834

加古川営業所
加古川市米田町船頭591
TEL. 加古川 5526
姫路営業所
姫路市市川橋1丁目13
TEL. 姫路 6145・7820

夢

永尾 永断選

夢はみなくらしに吸われて。赤字
夢かしら酔々昨夜を妻に聞く
幼稚園絵にいつぱいの夢を画き
夢のよな話にのって家も売り
子の夢に合鍵だけはうって置き
夢にまで見たふるさとにいれぬ
夢やうたわかつたで THE-END
夢の中音痴の僕が歌ってた
夢だから僕にも出来たアロポーズ
土根性夢を実現して戻り
夢多く希望に燃えた古写真
初夢にとっておきたい夢を見た
つのる思慕或る夜の夢で心中する
「電報へ」夢の不安が胸をつく
海からの風が未来の夢はこび
やりくりを夢にまで見る物価高
禁煙の夢にもタバコさがす汗
宝くじ庶民の夢を寄せ集め
子の夢をかなえたいので宝くじ
夢でないと夢で云ってる夢で覚め
子供等の夢は玩具になって売れ
へびの夢見た数日を期待する夢
夫婦喧嘩やっぱりに折れた夢
この年になって白紙で出した夢

ライバルが夢でも僕をリードする
夢があるから少年が反抗す
ああ夢でよかった妻や子の寝息
夢一つ持たぬ男のヒゲが伸び
夢で逢い現実で逢いまだ足らず
無理にでも忘れたい人夢に来る
切り抜けた苦境夫婦の夢育つ
社説また首相の夢を崩す朝
大望は夢と消えたかバナナ売る
話せない夢が笑いを押しあげる
朝方の悪夢へきれいに鏡拭く
一つ一つ天引きされて遠い夢
子に夢をもつて断る市の援助
ぐれて出た子にさえ母のかける夢
夢にまで見せ逢えはそつ気なし
ピアノ習わせて夢がある間借り
振出しに戻る夢あり紅をひく
誰の血が効たか生死の夢醒めはじめ

酒

渡辺 曉童選

上役のミスを肴に酒はずみ
勘定日その皮切りのコップ酒
重宝な酒で和解の手が打たれ
牧水の歌を思うて酒うまし
あふれそうな酒席へ主権者御満悦
じき冬が来て録音の杜氏の唄
成人の日を晩酌の座によばれ
凍る夜を重ねて銘酒造られる
出初め式済めば飲めるといふ安堵
酒がさせるのか男同士の握手
二日酔とも云えず欠勤風を引き
悪友の酒の電話を待つ日暮
十六時割勘酒へ気が揃い
コップ酒ほんの少し注ぎこぼし
その酔を計る盃つぎこぼし
梯子酒我が家へ近づきながら飲み
子の前で酒が女房の手を握り
叱られた妻水割りもしてみたい
なみなみと酌げば恩師は涙ぐみ
酒があるから出席の数が云い
もう少し飲んでも如何と云いが云い
一升が十日程あるふいとお酒
家で飲む酒は家計簿几帳面
奢って貰う酒ならすぐいける口
停電へ銚子をかばう面白さ
派手な酒も又よし性は善
ややにまで喜の寿の酒が行き渡り
すこしならいける女が隙がな
もっとも話しへ酒がさめてくる
酒酌いでやうか一輪差し孤独
盃を臥せて話に乗って来ず

大西八步選

孫の脊の高き障子の穴ならび
 紙コップ捨てず支縁に乗り換える
 節約の美德が紙の皺を伸し
 短冊も色紙も変えて秋にする
 三カ日以後は白紙の日記帳
 紙も絵も悪い雑誌がよく売れる
 二次会の連絡をする著袋
 祝膳の鯛紙包にして帰り
 古文書に紙のいのちを見直され
 画洋紙一杯童心あふれさせ
 一年生紙をはみだす字をならべ
 紙上プランでもよし夢たのし
 半紙一枚貰うに事務所暇がいり
 赤紙が戦時の母をおびやかし
 紙屑の中から探す領収書
 印刷屋紙がどうのと値引され
 シベリヤでつく知った紙の価値
 ウイスキーもて余してる紙コップ
 特価品でもデパートの包紙
 十二一重紙でも雛の美しく
 千代紙へ祈りをこめた千羽鶴
 便箋も春知り初めた紙の色
 紙の鯉孫の笑顔に出来上り
 紙障子貼り替えて住み日々好日
 ホッチキス紙の厚みを知る力
 新聞紙母は手早く山の幸
 広告の紙を勿体なく思う
 千代紙へいとはんというの想い
 名物を包み紙までも味おうて
 試験地獄へ白紙の抵抗

五客

人

天

軸（二人目の孫誕生）

使った人がみなほめる

川柳塔柳箋

本誌と同じサイズです

送料一冊
三五円

大 萬 川 柳

「職 人」

入選発表

選者 清水 白柳
 投句總数 七百三十二句
 入選 八十句

島根 清 泉
 職人の意地はどっちも引受ける
 大阪 鉄 舟

職人のおやつに困る好き嫌い
 富田 林 きはち

名工と呼ばれ一代きりの職
 新居 凡 生

職人が打てば素直な釘の利き
 米子 瑞 枝

職人の無欲は世帯まかせきり
 堺 千 子

機械化されても職人の手が足らず
 米子 千 代

親方に心預けて腕も伸び
 島根 正 朗

植木職キセルの方がよく似合い
 岡山 秋 月

腕前へ職人の名を聴いておき
 丸 龜 ゆずらん

職人の気ままを親類から惜しみ
 明 石 齊 花

はやらない職人掃除して帰えり
 香 川 醉 夢

看板屋妙なところから文字にする
 大 阪 形 水

前借りをして職人年を越し
 大 阪 弓 彦

母も子も職人氣質とあきらめる
 大 阪 双 葉

道具見ただけで職人腕が知れ
 島根 代 仕 男

職人の手抜き職人指摘する
 大 阪 滋 雀

停年はなし職人であるかぎり
 大 阪 旅 風

職人が違う障子のしまる音
 大 阪 喜 仙

背広着てても職人とう手のゴツさ
 大 阪 水 客

トントン屋冬の間近いリズム持つ
 大 阪 唐 佑

しゃべってても職人手許確かなり
 香 川 醉 夢

職人の気ままに添うて貧に馴れ
 香 川 醉 夢

奈良 十 悟
 昼めしを噛み噛み職人駒を持ち

岡山 七 面 山
 大工とは言わず建築業者です

大阪 琴 女
 手の平を見て職人だなど思い

倉敷 千 翁
 職人の肚が座っている笑顔

東京 泰 造
 焚火して鉋をといで昼にする

呉 魁 光
 ぎりぎりの納期職人慌てない

富田 林 東雲楼
 職人のギツチョ感心して眺め

倉吉 弘 朗
 職人で育ち仕事の虫になり

笠岡 遠 二
 働きのわりに職人貯めとらず

大阪 文 秋
 背広着て出る職人の小さい見栄

大阪 章 雅
 ハンダゴテ部品一個をつける職

布 齋 清 人
 職人の意地昼めしはあたまわし

和歌山 木 魚
 職人の子供が答辞読むという

高石 好 郎
 棟梁と呼ばれた指の古い疵

玉島 三 林 坊
 鉋屑あつめて大工屋にする

南河内 吸 江
 名人芸といわれ職人ぶが好み

大 萬 川 柳 会 々 則

一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その柳を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもつて目的とす。

二、毎月の出題並びに選者は清水白柳氏が担当され、投句は一人五句以内と定め官製ハガキに限る。選句は公平を期して到着順に一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附記して選句する。

三、毎月二十五日締切、翌月二十日発表。出題及び入選の発表は毎月の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め毎月のベストテンを発表する。天位四点、地位三点、人位二点、佳句一、五、平抜き一点とする。

五、毎年一月より十二月までを一年度とし年度間の総合点の成績に依り順位を定め年度ベストテン把持者に賞

職人の勘金儲けにははずれ
国宝の重文職人の名は知れず

倉敷 素身郎

定時制をやめ職人になりきる気
近頃の職人ライトバンで来る

美 弘 道

口出しへ職人アイと止めて去に
職人に嫁してへんくつにも馴れる

玉 島 旭 峰

職人で終る器用を惜しがられ
気がむけばやる職人の数が減り

大 阪 保 夫

職人へ頼んで被せた安全帽
サイレンへ職人かたき手をやめず

堺 慶之助

悪る気ないだけに職人すぐ怒り
手に職があつて言いたいと言え

石 川 宗太郎

水ばなをすすり老鍛冶火をおこす
職人へ尺に直して家が建ち

大 阪 小松園

職人に説明される破目になり
もの数の多い方が腕がたち

富 田 林 美 房

職人の腕が隠居にしてくれず
見習いが背広で通う芳基法

堺 一 舟

仕事着のまま職人ゐるけれど
信じざる客で職人ごまかせず

岸 和 田 美 房

引渡すまではわが家と思つて建て
兄弟子もなじとくろにタコも出来

き さ 子

職人の無口へ茶盆をつとておき
職人のプライドへ施主逆からわす

大 阪 梅 里

見込まれて職人養子に這入りこみ
墨引いてから職人の独り言

大 阪 春 果

手直しを頼んでからは寄りつかず
定年のない職人を羨まれ

荒 っ ば い 言 葉 職 人 子 煩 悩

職人の指は葉職人子煩悩
職人の目に涙む汗を手で拭い

大 阪 柳 志

そろばんが出来て職人あなどれず
段取りだけして職人来てくれず

比 呂 路

ビルの建つ中で職人めしを食ひ
人間国宝という職人の座りダコ

羽 田 野

職人の指きこちなく紙幣かぞえ
まあええというのに職人やり直し

大 阪 小松園

聞こえたらしく職人やつてくれ
職人が寄って新築くさすなり

大 阪 山 可 住

職人へ本の知識が氣にさわり
人ノ句

大 阪 小松園

職人も冬至十日は氣を使い
地ノ句

大 阪 小松園

雨の日の職人ちぐはぐに来る
天ノ句

大 阪 小松園

職人の父を尊敬して継がず
選者吟

大 阪 小松園

職人が下戸でどこやら頼りなし

大萬川柳ベストテン

(十二月現在)

一 梅 里 三六五 大 阪

二 水 客 三六五 大 阪

三 美 房 三六五 大 阪

四 柳 志 三六五 大 阪

五 柳 志 三六五 大 阪

六 柳 志 三六五 大 阪

七 柳 志 三六五 大 阪

八 柳 志 三六五 大 阪

九 柳 志 三六五 大 阪

一〇 柳 志 三六五 大 阪

一一 柳 志 三六五 大 阪

一二 柳 志 三六五 大 阪

一三 柳 志 三六五 大 阪

一四 柳 志 三六五 大 阪

一五 柳 志 三六五 大 阪

一六 柳 志 三六五 大 阪

一七 柳 志 三六五 大 阪

一八 柳 志 三六五 大 阪

一九 柳 志 三六五 大 阪

二〇 柳 志 三六五 大 阪

二一 柳 志 三六五 大 阪

二二 柳 志 三六五 大 阪

二三 柳 志 三六五 大 阪

二四 柳 志 三六五 大 阪

二五 柳 志 三六五 大 阪

二六 柳 志 三六五 大 阪

二七 柳 志 三六五 大 阪

二八 柳 志 三六五 大 阪

二九 柳 志 三六五 大 阪

三〇 柳 志 三六五 大 阪

三一 柳 志 三六五 大 阪

三二 柳 志 三六五 大 阪

三三 柳 志 三六五 大 阪

三四 柳 志 三六五 大 阪

三五 柳 志 三六五 大 阪

三六 柳 志 三六五 大 阪

三七 柳 志 三六五 大 阪

三八 柳 志 三六五 大 阪

三九 柳 志 三六五 大 阪

四〇 柳 志 三六五 大 阪

状賞品を贈呈し大会の選者
に推薦、祝賀宴に招待す

る。但し同点の場合は前年
度の優位によって定める。

六、本会の大会は毎年二月に
開催する。本会の会費及び

投句料は不要、但し大会の
会費は百五十円投句料百円

(句集代を含む)とす。

七、投句その他に就いての連
絡先は

大阪市阿倍野区松崎町三ノ

一〇 大萬川柳会宛

電話 5031

5032

大萬川柳会

一月の句会

玉造川柳会

十日(火)午後六時

抱負、魚屋、慰め

所 玉造交差点南一〇〇米

大阪信用金庫

南大阪川柳会

時 二十日(金)午後六時

冬眠、部下、出来ばえ、

控室

所 阿倍野区松崎町三ノ一〇

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

大 萬

川柳塔社同人

内藤 戸田 友淵 富岡 都倉 戸倉 遠山 天正 寺田 土谷 辻川 辻 辻 築山 津秋 田村 田村 谷沢 田中 田中 田中 田中 竹内 高橋 高崎 田垣 高木
きさ 古 貴 淡 求 普 可 千 花 亀 喜 圭 快 美 藤 好 万 十 狂 蛙 圭 操 雄 方 桃
子 方 山 舟 女 天 住 梢 宵 一 仙 水 夢 智 波 祐 里 方 二 子 三 声 大 里

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼中島生々庵主幹は12月7日、和歌山の七面短詩型文学クラブへ同選者の清水白柳氏と同行、忘年句会の席上で講演をされた。

▼七面短詩型文学クラブ(和歌山市)の新春句会が一月四日に開催されるが、作家秋田実先生の講演がある。大阪から清水白柳、不二田一三両氏が秋田先生のお供をされた。

▼橋本緑雨氏(大阪市)は1月24日南紀めぐりをされた。ご健康をおよこご申しあげる。

▼阿部佐保蘭著「川柳と翻訳」が一九六六年十一月二十日東京都中野区若宮三ノ四二ノ八、川柳翻訳研究会(振替東京一五八二二番 阿部潔俊名義)から発刊された。

製作は中央公論事業出版

英訳編、仏訳編、伊訳編、独訳編などにわかれ、ブライ

ス博士、堀英四郎先生の英語をはじめ、不刊詞会員の

笠原路生博士の独訳や麻生路郎、麻生霞乃先生の句

翻訳のみならず、川柳塔同人多数の自選句もあり、川

柳翻訳に情熱を捧げた著者だが、川柳塔の柳人に近親

感を感じさせてくれる。村田周魚、川上三太郎両氏の

序がある。二百三十八頁の美本、定価八百円。

▼平安川柳社創立十周年記念明治百年全国川柳大会は昭和四十二年六月四日(日)

京都の国立国際会館で開催の予定だが、投句は三月三十一日着便で締切られる。

兼題、開幕・押す・旗・電

宮・あす・坂・グループ・折り目・都会・両手・作品

は二句以内、各題別紙(原稿用紙半分程の大きさ)に

課題名、地名、氏名を併記の上、京都市中京区夷川通

烏丸西入、平安川柳社全国大会係宛。投句料は無料、

発表誌(川柳平安六月号)希望の向きは切手で送料共

六円を同封のこと。この大会には清水白柳氏も本社の

代表として選者に出席される

▼井上剣花坊師三十三回忌川柳大会は昭和四十二年五

月五日午後一時から鎌倉の建長寺内正統院本殿で開催。法要と講演の第一部、

句会の第二部、懇親会の第三部に別れる。雑詠は年中

の人事社会自然に取材した句で、各月毎の句を十二名の

選者が審査する。特別課題、星座が一題出ている。

各月毎二句以内。投句はハガキ大の用紙に住所氏名雅

号を明記、三月二十五日までに東京都杉並区和田一丁目五九の五、御尊寺川柳会

記念誌不用の場合百円)

▼川上三太郎氏(東京都)

が十一月十二日の朝、NHK

テレビで放送された女性の句の中に霞乃女士の「の

んではし」の名句があった。

▼児島市文化祭第九回川柳大会は昭和四十一年十一月

二十日中央公民館で開催されたが、盛会で葉書にあふ

れる柳人多数の寄せ書を頂戴した。

▼備前川柳社十一月例会は十日浜田久米雄居で。

▼柳都(新津市)の王者決定競吟の同人最優秀作家の

賞は小林雨太郎氏が、「鉢巻をとる君もてこぼし頭」

合掌が終りほつとなま臭い呼吸

などの作品で獲得された。

▼全国鉄川柳人連盟では新たに東京地区が運営に当ることとなり新事務局を、横

浜市保土ヶ谷岩崎町四三三

鉄アパートG棟十一号、高橋柳子方に設置された。

▼弘津柳慶氏(防府市)が十一月十二日午後七時より長野井蛙氏の追悼句会

を故人の宅で開催、十一名

の出席者が思い出話などに夜を更かししました。

▼山内静水氏は十一月二十日の児島市の大倉に竹原川

柳会の柳友六名とドライブをかねて出席、本田恵二朗氏

氏をはじめ多数の柳人との交歓に楽しい一日を過ごさ

れた。

▼越智一水氏(今治市)は十一月十三日松山の国立愛

媛療養所での療友会発足十周年記念暗窓川柳大会に

長野文庫氏に随行、関本柳

蘭氏と歓談、会員の快癒を祈りながら別れた。

▼病棟の古き政治へもつ怒り

▼関本柳蘭氏(松山市)は暗窓川柳大会に引続き記念

特集号、愛媛新聞の編集などと病人にあるまじき目まぐるしい日を送っておられ

る。「病軀今素朴な柳友にいたわれ」

▼藤原秋月氏(岡山県)は十一月二十日倉敷市文化祭

川柳大会に出席、数年ぶりに野田素身郎氏に会えて楽しく柳談を交わされた。

▼本田恵二朗氏(児島市)は「関西書芸」という書道

の出席者が思い出話などに夜を更かししました。

▼山内静水氏は十一月二十日の児島市の大倉に竹原川

柳会の柳友六名とドライブをかねて出席、本田恵二朗氏

氏をはじめ多数の柳人との交歓に楽しい一日を過ごさ

れた。

▼越智一水氏(今治市)は十一月十三日松山の国立愛

媛療養所での療友会発足十周年記念暗窓川柳大会に

長野文庫氏に随行、関本柳

蘭氏と歓談、会員の快癒を祈りながら別れた。

▼病棟の古き政治へもつ怒り

▼関本柳蘭氏(松山市)は暗窓川柳大会に引続き記念

特集号、愛媛新聞の編集などと病人にあるまじき目まぐるしい日を送っておられ

る。「病軀今素朴な柳友にいたわれ」

▼藤原秋月氏(岡山県)は十一月二十日倉敷市文化祭

川柳大会に出席、数年ぶりに野田素身郎氏に会えて楽しく柳談を交わされた。

▼本田恵二朗氏(児島市)は「関西書芸」という書道

の出席者が思い出話などに夜を更かししました。

▼山内静水氏は十一月二十日の児島市の大倉に竹原川

柳会の柳友六名とドライブをかねて出席、本田恵二朗氏

氏をはじめ多数の柳人との交歓に楽しい一日を過ごさ

れた。

▼越智一水氏(今治市)は十一月十三日松山の国立愛

媛療養所での療友会発足十周年記念暗窓川柳大会に

長野文庫氏に随行、関本柳

蘭氏と歓談、会員の快癒を祈りながら別れた。

▼病棟の古き政治へもつ怒り

▼関本柳蘭氏(松山市)は暗窓川柳大会に引続き記念

特集号、愛媛新聞の編集などと病人にあるまじき目まぐるしい日を送っておられ

る。「病軀今素朴な柳友にいたわれ」

▼藤原秋月氏(岡山県)は十一月二十日倉敷市文化祭

川柳大会に出席、数年ぶりに野田素身郎氏に会えて楽しく柳談を交わされた。

・新同人紹介・

保	大	西
西岳 詩	原葉 香	川誓 二
萬的・客遊子推薦	萬的・客遊子推薦	いさむ・生々庵推薦

誌に「玉露にも番茶にもなり苦勞人」の句を小田原城氏が書き紹介されている。

なお同誌で川柳を募集されているが恵二朗氏が選をされている。

▼村山光輪氏（大阪市）は十一月二十七日、春日とよ香譽師匠披露目会に出場、名取り豊香和として小唄高時を弾かれた。

▼浅川八郎氏（富田林市）は胸部疾患で十二月初旬入院されたとのこと。本社の忘年会へ出席されたが詳細は次号で。一日も早いご全快を祈る。

▼鳴尾公民館で十一月三、四日に開催された明和川柳研究会主催の書道展は二百

余の来会者に川柳のよさと深い感銘を与え大成功だった。

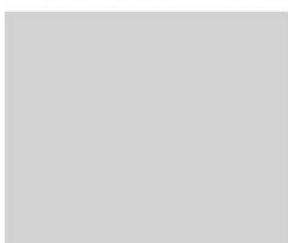
▼河相すゝむ氏（西宮市）は十一月八、九日東京十日十一日宇都宮と所要を済ませ、帰途鬼怒川、塩原、那須から再度宇都宮下車「前田雀郎文庫」へ行き、近くの二荒山神社に「夢の中ふるさと人は老いもせず」の雀郎句碑も訪ねて十二日帰京。十三日は故高須晴三味氏の一周忌に故人宅を弔問遺族や来合わせた御人と八名で多摩霊園へ。おりから

故人の遺句集が刷り上がったので、さらに追慕の情を深め一週間の旅をおえられた。紅葉に一足おそい

北の旅。

▼川柳むらこも（島根県）忘年会が十二月四日「かね平」で開催。

▼石坂新雪氏（米子市）は十一月三日清水一保氏と山陰川柳大会に出席、法泉寺・茗人・弘朗・明朗諸氏をはじめ多数の御人と宴に入り、「親しみは柳詠ひろげてはめ始め」と終始和やかだった由。



▼山上千太郎氏（小松市）は十一月二十九日、九五才の夭寿を全うされた伊藤茶仏氏の母堂の葬儀に参列された。「通夜の座の心の中

を風抜ける」

▼川柳句集「奈加川」名古屋の中川区川柳作家連盟委員十五氏の力作である、豪華な美本。頒価七百円、送料九〇円。序文は富士野鞍馬、金子吾風、浅井静光、齊藤旭映諸氏。「洒落一つにも貫録のある言葉、鮮山ほかに佳句がずりならんで

いる。発行所、名古屋市中川区東出町二ノ八、丹羽方中川区川柳作家連盟。

▼河村瑞川氏（大阪市）夫人が十一月二十九日朝逝去された。三十日午後一時からの葬儀に、中島生々庵主幹（医師会代表）、福井野送路氏（趣味の会代表）、薫風（川柳塔社代表）が参列焼香した。

▼水粉千翁氏（玉島市）は玉島川柳会のため日頃尽力されているが、この程「川柳道場」の小誌を発刊された。課題吟担当の選者が没句を佳句に添作指導する欄を特色としている。新人育成には好企画である。

▼堀江正朗・芳子さん（島根県）は、ご夫君が盲目な

のでテレビよりラジオを愛され、昨秋「三夫氏作の漫才を聞き、その足で」むらこも句会へ出席、こども皆さんが漫才を聞いておられたので、席席を「面白」とされたそうである。

▼清水白柳氏（大阪市）は十二月十一日鳥取県浅津温泉浅津宛（同人青木遊星氏経営）で開かれた鳥取県の中川柳塔同人懇親会に出席され、主幹筆の短冊を土産に持参された。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

タケタ薬品

アリナミンA

本社十二月旬会

会場 自安寺
五日 午後六時

本年最後の本社旬会である。ストーブも今月からはいつて会場内は春心地というところである。

戸田古方氏の柳話は川上三太郎氏の「川柳二百年」をわずかに三十分間ほどにダイジェストされたもので、近く本誌で発表の予定である。内容もわかりよく好評だった。

42年度から川柳塔杯が創設される。兼・席題の秀句を生々庵主幹が再選。受賞資格は出席者ということになる。(河井庸佑整理)

出席 花宵・公江・与呂志・水客・甘草・滋雀・痴亭・美己代・一三夫・葛城・双楽・島莊・梅里・天樹・好郎・万の弓彦・静歩・古方・誓二・白柳・露芳・多蘭子・柳太・一乃字・操子・白柳・武助・静馬・白漢子・頂留子・一栄・生々庵・花梢・清人・季賛・孚彦・たつみ・一舟・柳宏子・すむ・句楽・坊・有子・金三・弘子・形水・凡九郎・珠笑・文秋・吸江・柳志・野迷路・千梢・美房・葉子

席題「パトロン」 阿部柳太選

パトロンを横目で見送る刺京着
パトロンが変るるに紅が濃く
パトロンはロマンススグレ一隅の椅子
パトロンが出来てマダムは又さ
よいの口客はパトロンだけの店

野迷路
万の的
痴亭
花梢
たつみ

パトロンが出来て鋭い雲が消え
銀行と言うパトロンで息をふき
半年もつづかずパトロン又替り
パトロンがあると思ふダイヤ指す
パトロンが替り今度は字を習い
パトロンが来てはるらしい灯
親指の合図パトロン見えている
パトロンを見せたがらないま
パトロンがあつたら働かずかい
一流になればパトロン忘れられ
パトロンの死をマダムは悲しま
パトロンが咽でのもんでの開店日
パトロンが出来てボリニウムつ
パトロンに聞かせる声は別に持ち
盛装をしてパトロンの嘘と居る
俺が僕が僕がパトロンと思ふ
パトロンが清潔すぎて物たりず
パトロンが知れて人気が急に落
士佐犬のようにパトロンで居る
パトロンのピンチを店を売る覚悟
パトロンが阿呆な客と見てる奥
愛情もなくパトロンの世話になり
バババと呼ばるパトロン板に
パトロンを覚えてもたない十二
抜け目ないパトロンぞろぞろ持
パトロンへ表面マダム無表情
パトロンのある日小さな黙秘権
パトロンが邪魔になるほど貯
パトロンから吸いつばめを手
月水金パトロンさつちやや来る
パトロンの目にマダムが持てず
パトロンといやいやふぐにつ
席題「知恵」 植山武助選

コマシヤルだけうさえる知恵が
心配と欲目知恵熱かと思ひ

珠笑 双楽 花梢 柳宏子 一乃字 梅里 古方 形水 一三夫 多蘭子 花梢 生々庵 凡九郎 一三夫 双楽 清城 金三 八文 静馬 形水 静歩 白漢子 千梢 一乃字 柳宏子 柳太

千梢 柳宏子

もどか恋へマダムが知恵を貸し
ポンと膝叩いて急場を抜ける知恵
入知恵をこそばやく聞く赤い耳
願かけた文珠に知恵を借りたま
同じ金持ても知恵の差ぐつと
サル知恵とデザインで建て直し
里帰えり知恵の知恵を母に借り
老いて子に従う知恵で用う住み
大根の葉の榮養を捨てぬ知恵
知恵の輪に大人三人からかわれ
入れ知恵まちまちついで満三
悪知恵もぼちぼちついで満三
他人様の知恵借り株の値又下がり
うち中の知恵でクイズがまじ
借りた知恵すぐ後からはげかり
知恵のない話結局飲むとする
金の顔見せたうと男甘い知恵
肝心の時には知恵が働かず
知恵おぼろけは此の子婆ちゃん
かき入れは二、三月と知恵の神
〇歳の知恵は乳房を泣いてよび
身寄り無き女は女の知恵で生き
入知恵で儲けにうれしくのつてやり
片言の知恵にうれしくのつてやり
知恵借りて来たとはつて金を貸さ
言ひ負けて知恵足らんんだ酒の味
神杉の知恵借りにゆく年の暮
七転び八起しで出る知恵に生き
知恵のない話火鉢の灰をかき
よい知恵が出来るでせぬ十二月
下積みに馴れた目先の効かぬ知恵
憎まれ口たたきボツボツ知恵

柳志 滋雀 葛城 千梢 花宵 美己代 美己代 弓彦 生々庵 柳志 金三 静歩 好郎 一三夫 弓彦 一三夫 野迷路 白漢子 野迷路 花梢 操子 静歩 凡九郎 武助

末っ子の愚痴を聞いてゐる鰯雲
 そうでつか末っ子でゐる馬鹿も
 末っ子が姉の見合ひをのぞきに來
 末っ子の宿題筆跡みな違ひ
 末っ子が簡易保険をかけてくれ
 末っ子の學費も長男背負わされ
 末っ子にしようとも眞似をされ
 末っ子が車をねだる年になり
 末っ子に鍵を渡したへ稼ぎに出
 末っ子が一番遅くへ嫁に行き
 末っ子を嫁がすまでのアルバイ
 末っ子に石焼ひももの笛追わせ
 末っ子のエルツ母親まごつかせ
 生さぬ仲末っ子犬がよくなつか
 祖母見送つてから末っ子に娶り
 末っ子が免許をデパート用にとり
 末っ子に俺に似て來たのみにっ
 新飯名をまた末っ子に注意され
 末っ子の恋はすんなり許される
 末っ子をもせてゐる片身わけ
 末っ子の母をいたわる口答え
 養老院末っ子だけは逢ひに來る
 末っ子も東立ちさくろははせたま
 唄好きを末っ子だから放つとかれ

兼題「隣り」

高橋操子選

お隣りが買ったとポーナス当りのお隣りも受験電灯まだ消えず隣まで焼いて不仲になる失火お隣りの甲斐性が目立つ倦怠期隣へも分けて郷土の味俣ぶポーナスが出たか隣の派手な声お隣りも買ったと押売り嘘をつきお年頃隣同士で気をもましたしとも隣の猫にしてやられ

静宏子 花太 柳太 弓太 柳太 好彦 孚彦 形三 弘三 珠三 弓三 静志 柳志 梅里 白溪 生々 白柳 美房 季替 花梢 多志 万栄 子選 孫子 萬己代 金三 柳宏子 葛城 静馬 金三 東雲楼

隣席もあくびを殺す顔になる。ケンカした時だけ隣り泣きにくる。白く焼けた隣りは肉の香を届け、分譲地隣も停年らしい人。丹精のへちま隣りでぶらさがり、お隣りの早い婦人を例にとられ、お隣りの早い婦人へ席をとり、お隣りのイビキ寝つかれ、夜汽車も張りあっていても隣にたのまれる。お隣りをひきあいに出す妻の愚短隣。さうのさき込んでるスポーツ紙荷かさりの隣りにうちの娘もあとなりましてカラーテレビが来るとなりまして。親切を隣りは義理でかえして来、お隣りがピアノを買って家が、留守頼む隣りに今日は先越さし、聞き合せ隣りに今日は一番悪い口、お隣りの額に合した奉加振文化とは悲し隣と厚い壁、お隣りのビルに太陽ぬすまれる。打水の礼言に合うて二十年。

兼題「キヤリア」

川

兼題「キャリア」

川村好郎選

キヤリアは無くても社長の御令旨
過信したキヤリア冬山の事故で出る
政治家のキヤリア叩けは埃出る
キヤリアでこゝと学卒へ挑戦し
気をとるゝにキヤリア技術が況
巻尺は要らぬとキヤリア目で計り
就職難キヤリアなんぞ言うといれず
万卷のお経もキヤリアそで読む
顔の皺一つに読むキヤリア
キヤリアには触れぬ飯場の隅生
キヤリアへフアイト君は歯がたず

すゝむ 滋野 生々 痴迷 滋柳 弓多 章芳 正郎 好郎 操一 凡九 武板 多蘭 一頂 柳花 頂留 美つ 万房 文秋 梅珠 万里 花文 どん ぐく 宵秋

常任理事会は12月3日開催。新年句会や倍加運動を協議した。出席者は白柳・多久志・文秋・梅里・すゝむ・栗・好郎・古方・生々庵・薫風・一三夫諸氏。

セーバスのコツ足でおぼろ二十年
実力で来いとキヤリアがを言ひ
結局はキヤリアでギヤラを決められ
冬山へ挑むキヤリアを危ぶまれ
老医師のキヤリア信じる手術台
年寄のキヤリア葬儀の役に立ち
負けつぷりなキヤリアをほめて
人徳を買われキヤリアに触れて
鶴ヶ嶺キヤリアが光る勝ち名乗り
キヤリア不足フアイトさバニー
仲人としてのキヤリア万事如才
キヤリアとは別に定年や事知る
分償價れ買われて整理委員長
ホステスのキヤリアはく手際
定年のキヤリアを下請け買で来る
学校出の理屈キヤリア氣にいら
あがらないこともキヤリアとて認め
国宝のキヤリア光る指のタコ
姑のキヤリア味見はいらぬ鍋
板前のキヤリア変人押通し
キヤリアの差ほどは魚喰いつかず
こという時に一発出るキヤリア
人気よりキヤリア舞台広う見せ

本年もどうぞよろしく。

川柳塔社句会部

好形万白花野白た清痴静一吸一清一梅柳一静一柳梅梅英
郎水の的千子檜路柳み人亭馬一三夫江人里宏子馬志里里已代



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は發表誌のように。

金井文秋担当

第二回和氣川柳大会

藤原秋月報

標識を無視アベックが踏む芝生
奏晴らしい恋を広場で拾うて来
給料日サインでぐるぐるのれん
着ては脱ぐ流行おくれの服と靴
衣食住足りて礼節放つとかれ
長い春父母も認めたゴールデン
妻好み色はさめたが平和な日
ちやら書のサイン貰うてうれし
湯の街の広場カンナの緋に映ゆる
更生の友へ保証のサイン貸し
記者団に囲まれ勝者小さく居る
潔きよく青年らしく非を認め
かけものスリがサインを読み違え
断崖の標識突つ走りたい日も
人間の死を人間がただ聞う
老夫婦サインなくとも通じ合い
日曜の広場はババがコートに出
反対をして存在を認められ
ビル林立標識の要る役場

胡風 三六 知水 和恵 文平 正三郎 豊坊 貞花 白子 政巳 不朽 左馬 白水 まこと 柳五郎 照路 寛子 武夫

灰皿があり禁煙と書いてあり
服装にゆかしい人情味があふれ
おさがりの服へ刺繍を添えてやり
雑談に囲まれ本論動けな
働ける夢と希望がある広場
広場から十円玉を拾って来
達意でなくとも個性のあるサイン
七輪をさげて広場へ月見に出
吹きさらす広場歴史を変えてゆき
この椅をもうこきりで去るサイン
平和には賛成僕もするサイン
売つこになればサインを書しぶり
サイン責め黄色い声に取り巻かれ
百万の味方は妻に認められ
OKのサインは指で輪を作り
因襲が認めてくれぬ日の孤独
胸はずむサイン別々中座する
引つ越しの飯場背広で別れて来
すりわいた傷が残っている広場
金持ちが遊ばす勿体ない広場
かく芸あれから社長に認められ
サインもスターの方はガムを噛み
サインだけ上手になって人気出す
真実を認めてくれたオニ刑事
来客のうしろに廻りサインする
新調の服校庭でしょんぼりし
祝日で老人の地位認められ
バビの顔にらみつけサインする
サインにも年頃はいつた字のかま
黙認と言う愛情で縛られる
落日歌手サインも少しくずれかけ

孔明 博友 のぼる 宗義 初美 久米雄 一声 柳子 醉月 品品 草花 洋児 清海 静泉 峰居 千翁 千詩 一平 曙花 のぶや 千茶 ひさお 真備雄 秀峰 無泉 寛坊 呆子 木齊 紀子 伊久野

折くきのサインするのに手がふさぎ
通勤者服の替え方うまくなり

和氣川柳会

藤原秋月報

横書きの名刺で初物食いにされ
タオルだけでもう饅頭包んどき
学生のバイトタオルが真っ白い
タオルから真犯人の足が付き
横書きの数字が憎い家計赤
いつ欠伸したのかキャベツ版で
バスターとは思えない服ができ
格好が親によく似た頬冠り
濡れタオル待つ妻外で月に濡れ
表れも横字で書いた門構え
欠伸する女へ愛の危機迫る
お歳暮にもらったタオルもよそに
ハンカチで欠伸を捨てた令夫人
ドイツ語のカルテが読める不器用
横書きの封筒文盲持ち歩き
タオルきりの締めて土工に隙がき
誘い合うように故郷灯がともり
出しやばりの自信過剰を持て余し
お喋りの後は欠伸をして帰る
タオル一本寝冷えたらを孫に縫い
林間下駄タオルが腰でカジを取り

関学川柳会 (西宮市)

水仙 正美 胡風 あきら 知水 余霞楼 文平 のぼる 紀子 楽水 曙花 千代香 和恵 左馬 白水 豊坊 繁子 不朽 秋月 照路 柳子 三六 古方 すゝむ 薫風 舟遊

仲たがいこぬか雨にも腹が立ち
口先の挨拶だとはつゆ知らず
挨拶を舌ですませるランドセル
計画は雨の行程考ええ
晴耕雨読されど残り残されそう
時の流れ仕方がさうおじいちゃん
霧雨の路の彼方も一人一人

王造川柳会（大阪市） 西出一栄報

野天風呂女に浴衣見つからず
方言の判らぬままに話をし
文化住宅下と不仲になる二階
子を置いて帰り夫の出方見る
応接間ちよこちと覗き来るケーキ
都会夜ケーキの如くビル灯る
オイルナイトまでにケーキと父帰る
あと押しがあるなど気付くも元氣
あと押しの方が怖くて折れあえず
満員車峠が越せず降りて押し
妹があと押しをする純な恋
かくれるにしても嬉しは春霞
菊人形根のある鉢は裾の中
雑草にかくれて野菊そつと咲き
白バイにドライブの味吹き消され
開拓の余地をドライブ見て帰り
ドライブウエー史蹟も削る青字真
ゆれるだけゆれて運勢生きている
易の灯は此所に見付けた溶鉱炉
運事は此所に見付けた溶鉱炉
日料は値切らずしゅちゃん手相見せ
後家相と云われ亭主に黙ったとき

久柳子 柳恵 無心 鷗石 浮彦 仙楊柳 皆無
照一 寿美司 金三 文秋 柳宏子 六竜子 凡九郎 あいき 一舟 貞山 白柳 風仙洞 一栄 宏方 千葉 滋雀 静歩 やなぎ 中性尼 章雅 笑巳代

晩年になって運勢上を向き
南大阪川柳会 金井文秋報

流行を追うて月賦に追われとり
邪魔にせず祝うて呉れる古稀嬉し
二三日旅に出て見る金詰り
暮し向き見せられ貸しはと云わず
内祝いの龜が風呂場で泡になり
あきらめて立てば隣は釣れかかり
折込みのピラが匂わす金詰り
宮参り主役は寝てる祝膳
はいはいと答えて母は老けてゆき
金詰り俺の値打ちに肚を立てて
モンペ着て出でニューモード帰る来
参観の親が答えを言いたそう
すれ違い邪魔くさそうに返事する
あきらめた念をうたた寝呼び起し
あきらめ頃にはホルモン効きはじめ
ニューモード大根足で踏むミシン
お人柄内祝にも生かす趣味
子宝はもうあきらめて銭を貯め
あきらめて待つ顔にローカル線
金詰りなくば年末らしくなし
金詰り顔色わるいなと云われ
お答えします甚だ遺憾に存じます
金詰り星まばたいているけれど
金詰りやそうがダイヤへ列を
金詰りソロボンふせて愛知り
あきらめてからほんとうと知り
車検くる頃と下取りすすめに来
あきらめるつもり落葉と共に焼き

美介 梅里 金三 水客 文秋 滋雀 静馬 一栄 花梢 一舟 与呂志 あいき 白柳 小松園 吸江 柳志 弓彦 古方 清人 笑巳代 双楽 梅里 十悟 舟遊 阿茶 千万子 痴亭 凡九郎 千梢

つつましけれど母中心の内祝
冷笑で答えるににくい黙否権
無心状うんとすんとも答えなし
東伯町文化祭川柳大会 清水一保報

物価高サンマの煙もたえ勝ち
産業の道路山脈つきぬける
産業に合理化と云うしわが有り
新産都海へ海へと広げられ
又涙誘う死顔の美しい
恋をして月のきれいな事を知り
美しくはかなく病棟の恋終る
落日も助太刀もなく裏切られ
へそくりで助太刀されて年を越し
妻の座に馴れて実りの鎌さばき
里帰りみりの秋を打診する
信じてるはずが不安の湧く日暮れ
父親になる産声を聞く廊下
頼母しと嬉し我が子の意見聞く
エプロンの笑顔の妻へ親が晴れ
サンマ焼く匂い庶民に親しまれ
給食のお蔭でサンマも喰べてくれ
サンマ焼けるまで大根子が卸し
てのひらにのせて実りをたしかめ
美しい夕焼農婦の足急ぐ
美しいだけでは姑氣にいらす
鳥ヶ辻川柳会（大阪市） 森下愛論報
新婚にあてられどうし秋の旅
冬物まで用意して出る秋の旅
窓外は祭まつりの秋の旅
良夫 甘草 十方 八郎 章雅 喜仙 独歩 精泉 吾柳 瑞枝 蛙眠子 源太夫 礎山 笑枝 大鳥 千代 石花菜 一保 布堂 祥月 明朗 名人 秋女 つる子 花子

電話参上がなかなかやって来ず
 方便の嘘を電話で軽くかけ
 ともかくも来いよと電話酔い
 お父ちゃんまた酔えますよ電話口
 二次会は洋酒にきめた飲み仲間
 幸男

大鉄川柳会 (大阪市) 辻白溪子報

法衣まとうて俗人へ背を向ける
 高窓に女ひっそり独り住み
 野宮の苔へシャッターの音湧える
 天竜寺お堀の水も枯れて秋
 同僚の趣味で職場に花絶えず
 祈願石へ高校入試の母子の手
 落柿舎へ秋の陽まともに人がより
 信じ合う同僚少なき世を嘆う
 同僚の出世が僕をアゴで使い
 軒先の柿一ぱいに陽は赤く
 落葉ふむ心は嵯峨の人となり
 竹藪にこぼれる秋の静かななり
 苔の波陰も日向も光ってる
 竹を切る音カカカタと鹿王院
 秋にとけこむ様な読経も嵯峨の寺
 秋の庭ただ一匹の蝶白し
 奥嵯峨の史蹟は藪の径を抜け
 白溪子

交通局句会 (大阪市) 児島与呂志報

偉はどこにあるかと子沢山
 パーベ来て無口案外よくしゃべり
 気休めと知りつつ指切りして別れ
 初恋は次の逢う日を指切りし
 指切りで信用させて浮気をし
 病室は消灯をして見るテレビ
 北人

草右 没食子 竹荘 落児 幸男 宗梧 卯門 柳村 岳詩 尚山 ただし 定子 勢火 季賛 衛水 たつみ 笛生 求女 杜的 万的 水客 白溪子

おはなはん見てから朝は家を出る
 もうすぐに市電は死運にのんか
 平凡な希望が母を安堵させ
 指切りのつまった指に裏切られ
 ヒキダシのつまった様に市電来ず
 安全な市電にしとく子の定期
 希望する職へ学歴邪魔になり
 たわむれと知らず紅指からませる
 落葉踏み踏み我が将来を考える
 ふる里がテレビにうつるなつかし
 無縁墓地今日は落葉を焚いてくれ
 衣食足り残る希望は2DK
 例えばの話で希望聞いて去に
 僕の絵が市電に出てたと高い鼻
 ゲンマンで別れ惜しんだ法善寺
 希望校金のかからぬ方を決め
 レールだけ残し市電は役目終え
 テレビでもハッキリわかる顔の鑑
 落葉焚きさいもの香りものせて来る
 初恋は次の逢う日を指切りし
 指切りでマダムちよつと氣を持
 お姑の希望で秋に早められ
 お月見の土堤にまんじゅしゃげ
 養子なら美女で家土地ある別居
 希望まだ捨てずかがとばちびた
 現金で買った自慢をする女
 備前川柳社例会
 反省をうながす課長へうなだれる
 反省会脱白小僧小さくなり
 出戻りが反省をした口をきき
 首相反省襟を正して行くとい

屯坊 タロバ 雅万 凡々 正則 鉄舟 笑風 胡蝶 孤舟 喜久子 清流 利郎 継之助 一乃字 寿美 洛醉 みのる 欣也 作舟 雅果 松亭 三十四 漫多郎 鉄児 与呂志 正美 柳子 伊久野 竜泉

品質優良

先カワペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪府東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

反省をすれば崩れそうなる愛
 反省の意味も知らずにあやまる気
 反省は波立つ胸をまたしずめ
 反省の余地ないことで里へ行き
 反省の心進歩を約束し
 反省なんかと十代胸を張り
 反省という椅子があり明日があり
 反省が過ぎてノイローゼにかかり
 俺なりに俺を見つめて居る茶の間
 私の反省がいる不仕合せ
 私とわが過去を振るえり子に意見
 反省の空はきれいに雲がなし
 真直に生き反省のいらぬ日
 秋月 芳米 文平 浄美 胡風 初美 裕美 卓美 幸仙 みのる 仙ゆき

史鬼郎報
好遊郎

好陸雄星茂瓢泉立
郎子康斗兄睦兒

好郎報

好梅をい誠比草雄岳痴喜功勞双弥一雪生吸
郎里を二呂路春案太亭風雄樂生人男長江

めぐみ　マサエ　茶坊　幽玄　浅女　狂太　輝成　かをり　和子　八千代　重夫　寿美　義宏　比呂　竜天　聖二　於千　玉水　敏凡　一一　けい子　梅里　好郎　南柳報　美路　喜正　師津　ひでを

ジェット機は大安組を詰めて飛び
 大安に選んだ人に泣かされる
 大安を間違つたまま式を挙げ
 年末はとうなとねと腹をきめ
 猫の手も借りたい様な年のくれ
 この辺に窓がほしいと妻の知恵
 ありそうな運も掴まず年のくれ
 膝頭いまま十八の丸み見せ
 老人ホーム広済会（小松市）
 仲よしに次の約束して別れ
 禿頭会みんな磨きをかけてくる
 洗い髪くしのはこびのなめらかさ
 ほがらかに唄が出てくるよいお酒
 国政に恥なき徒輩のいる怒り
 樹や石に心静もる歳を知る
 たけはら文化祭協賛會
 夜のテレビ父もまじって奪い合い
 静水報
 洋子

新聞が戦争怒るもうやめると新聞が読めると妹胸を張り倅せはあの日を知らぬ原爆忌なにげなく読んだ格言身にしみるオハヨウと声だけでそれでいて楽し借金を払って閉める戸が軽しペン替える疲労と知りつなぐ君へ探偵小説を読む時の頭澄み大掃除去年の記事に皆んな寄り新聞がそんなにいいかお父ちゃん向い席少してれてる新婚さん明治節昔もはぐくむ文化の日十八の気分も小じわかくされず檻の驚つかまるだけの爪になりインクつば満たせど秋の夜の孤独君の次は唄いやすいと賞めてくれ秋の日のつるべ落しに声尖り主婦の手に秋があふれる市場籠通勤車私の降りとこで空きみかんわく手が美しい病みあがり残り火を集めた若さでも若さ内職の一部りの家で貯金もしソロバンをいれ家計簿が恐くなり出産へババはなんにもしてやれずおはなはんみたいな母になる決意彼岸花燃える思いの過去をもち鍋かけて来たど慌てたのにたまげ諦めていたから嬉しい落し物試験までもうあと三日よく眠り眼が覚めればまだ踏んぱんシン足音もなく思春期の妹が帰る

日出夫 浩美 浄子 延子 笑子 扇水 和尾 花洞 松緑 文晴 幸博 尚吾 吞竜 柳漁 二枝 孚彦 松風 よし恵 無門 鬼焼 操志 静子 俊夫 菁居 そのみ 澄専 房枝 一健 俊路 不蘭 幸

舞を舞う如し枯葉のいさぎよし親の気に入る子で不安ふと感じ選挙戦たけなわ一票もつ誇り柘榴裂く女あまりにも凄艶二つ下あの娘は僕の宝物笑う娘の虫歯ちらつと見てしまし誰れも気がつかず私の誕生日そうだったのか誕生日のおはぎ赤いリング実った庭に風さやか机たのしあれこれ更ける秋燈下

峰泉 政己 輝雨 静火 静子 房水 静庵 紫苑 多幸 富士 生弘 清江 久坊 茶々 源州 芳水 濁子 繁登 一江 久涯 田生 弘休

神前の鏡に心よみとられ幕合に鏡うてのぞくコンパクト水鏡石投げて消す二人連れうす化粧しわもきれいになる鏡鏡だけ忍び泣くのを知っている念入りな化粧鏡に首つたけ鏡とは知らずに蠅が突き当りワンマンカー鏡車掌の役もするバックミラー見て見なれどもにやがて鏡見る暇出来た頃シワだらけ溜息を鏡にはいて白髪抜き泣き笑いそのまま鏡まねて出る一思案して冬の朝床を出る借りたこれ顔か鏡を見ておいで花嫁が鏡に立った晴姿

峰泉 政己 輝雨 静火 静子 房水 静庵 紫苑 多幸 富士 生弘 清江 久坊 茶々 源州 芳水 濁子 繁登 一江 久涯 田生 弘休

★

こちら報道部

▼奥谷弘朗氏(倉吉市)からのおたより。不
二田一三夫先生に十二月九日(鳥取県同人

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 025 5031・5032
南区墨屋町三ツ寺センター
TEL 025 9184

懇親会の前々日)大阪管林局出張の際お会いしているいろいろお話をしました。又松江梅里先生にもお会いして川柳塔のため頑張つて団結を強くするようお話をしましたが、今は大事な時期だと痛感しております。中島生々庵先生へ。

▼藤本礎山氏(鳥取県)鳥取県同人懇親会には大西八歩先生もご出席で意気あがりましました。まだ四名読者をふやしたただけですが倍加運動へ必死です。

▼清水白柳氏(大阪府)浅津苑の青木遊星氏ほか鳥取の同人諸氏に大変お世話になりました。厚く御礼申しあげます。
▼西いわを氏(大阪府)市制変更により大阪府藤井寺市野中一六七。
▼訂正)近江砂人氏の新住所は、芦屋市山手町三七芦屋グランドハイツ三一。

・2DK・

★あけましておめでとう
ございます。
★未紙に申煙草（ひつじ
がみにさるたばこ）とい
って、むかしから羊の年
には紙がよく売れるとい
われている。倍加運動が
うまくいって、こしは
雑誌がよく売れるとい
が、サテどんなんものかナ
★諫早の靈眼子氏が20名
ふやしてくださった。
★川柳塔の雑詠出句者が
一五八氏。ユーモア特集
が前年より数氏へったが

とにかく好調である。
★スペース・マヒで12P
ふやしたが、それでもお
つつかず、大八先生、鞍
馬先生ほか多くの原稿が
次号へまわった。おわび
いたします。

★年賀広告のご協力、あ
りがとうございました。
★一月四日には秋田実先
生のお供をして、和歌山
の「七面短詩型文学クラ
ブ」へ行く。こんどは漫
才関係ではなく、川柳グ
ループへご講演をお願い
したからである。
(不二田一三夫)

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
近作柳樽 (10句) 西尾 栗 選
課題吟 (各題5句以内)

「良 心」 池田 古心 選
「メンバー」 福田 丁路 選
「空 港」 黒川 紫香 選
★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社新春句会

日時 一月八日 (日) 午後一時
会場 自安寺 (妙見さん) 市電千日前下車スグ北側
(電話 211・1478番)
柳 話 中島生々庵
★短冊交換会 (二人三点以内)
★川柳塔杯創設 ★雪月花句戦
★四十一年全出席者表彰
兼題 「大 工」 富岡 淡舟 選
「蝶ネクタイ」 若柳 潮花 選
「正 体」 市場 没食子 選
「羊 体」 松江 梅里 選
席題 三題 (題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円
・投句だけの方は切手50円封入

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
近作柳樽 (10句) 西尾 栗 選
課題吟 (各題5句以内)

「倒 産」 木村 涼人 選
「花」 津秋 六花 選
「プラン」 友淵 貴山 選
★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新なづかいにしてください。

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

電 話 大阪 070 3985番

「女」「空白」
2月の兼題 「ペン」「有料」

定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料共)
一年分 千四百四十円 (送料負担)
昭和四十一年十二月二十五日印刷
昭和四十二年一月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地
編集兼 発行人 中島蓬太郎
印刷所 太陽印刷株式会社
発行所 川柳塔社
電話大阪・二七一・三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

栗田三枝子

毎日の健康管理に

活性アミノ酸製剤

アスパラ

常用に **アスパラ-L** お子様を強く **アスパラ** 児童用

目の健康に **アスパラ** 目薬 大型内服液 **アスパラC**



アスパラ



このマークの
のお店で...

●健康づくりにアスパラ効果
アスパラは、体じゅうの細胞内
で働き、生命のカギをにぎる酵
素を活気づけ、疲労素を取り除
くなど、新陳代謝を活発にします。
ぜひ毎日お続けください。



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬菜 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年十二月二十五日 印刷
昭和四十一年一月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔・一月号

近鉄特急で 日本の氏神さん 初詣と伊勢志摩国立公園初旅

お伊勢さん初詣

神宮(外宮)参拝は伊勢市駅西口徒歩10分 外宮〜内宮バス20分
神宮参拝と伊勢志摩スライジン観光バスは伊勢市・宇治田原駅前から

初詣特急[®] 越年号・迎春号 増発 31日全線終夜運転

大阪上本町から.....特急1時間51分	片道 750円
京都から.....特急2時間21分	片道 870円
名古屋から.....特急1時間23分	片道 620円

(いずれも座席指定特急券とち・こども半額)

神宮から[®] 初幸の末[®]が授かる近鉄初詣乗車券発売中
お求めは12月31日まで 有効期は12月31日・1月22日



■近鉄東海を便利に結ぶ近鉄特急で 伊勢神宮初詣・伊勢志摩国立公園初遊など
近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行会社の営業所へお申し込みください。

近鉄



一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内省御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・海・御影

定価 百二十円 (送料六円)